

高校2年生から大学4年生まで生徒はどう変わったか？ －高大接続改革、資質・能力の育成の意義をデータから見る－

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学特任教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp



ウェブサイト「溝上慎一の教育論」
<http://smizok.net/education/>

今日の話に出てくる用語や概念の詳細
を知りたい方はお読みください

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年
京都大学助手、2000年講師、2003年准教授、2014年教授を経て、2019年4月より現在に至
る。京都大学博士(教育学)。
* 詳しくはスライド最後をご覧ください

「学校と社会をつなぐ調査」企画から実施まで

2014年7～9月

MEETING

全国8会場 分析結果報告&シンポジウム 於：金沢会場・札幌会場・福岡会場・広島会場・大阪会場・名古屋会場・仙台会場・東京会場 [資料等詳しくはこちら](#)



2014年6月

PUBLICATION

学校と社会をつなぐ調査 第1回調査(2013年秋実施) 分析結果報告—1時点目(高校2年生) 報告書— ([報告書PDF](#))

2014年5月10日

MEETING

高等学校連携協力者向け第一次成果フィードバック 於：河合塾麹町校(東京都)

2014年3月13日

MEETING

京都大学・河合塾合同記者会見 於：航空会館(東京都) ([案内](#) [会見スライドPDF](#))



2013年4月1日

OTHERS

プロジェクトの開始 *全国の教育委員会・高等学校へ案内 ([趣意書PDF](#))

2013年3月18日

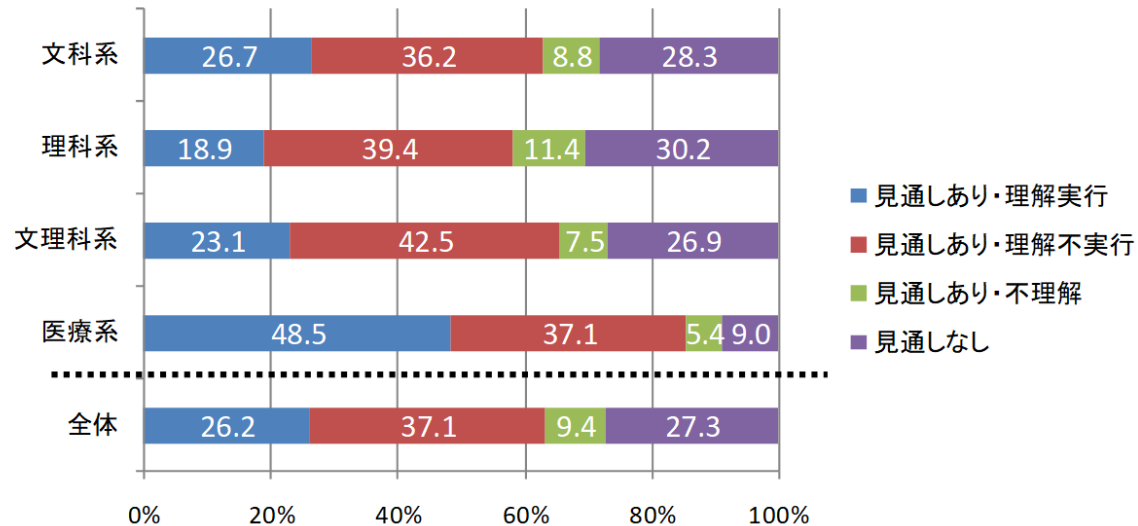
MEETING

京都大学・河合塾合同記者会見 於：霞山会館(東京都) ([案内](#) [会見スライドPDF](#))

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/>

二つのライフ(Future Life+Present Life)

二つのライフ(将来の見通しと理解実行)



大半の学生は将来と日常が接続していない

Data Source:

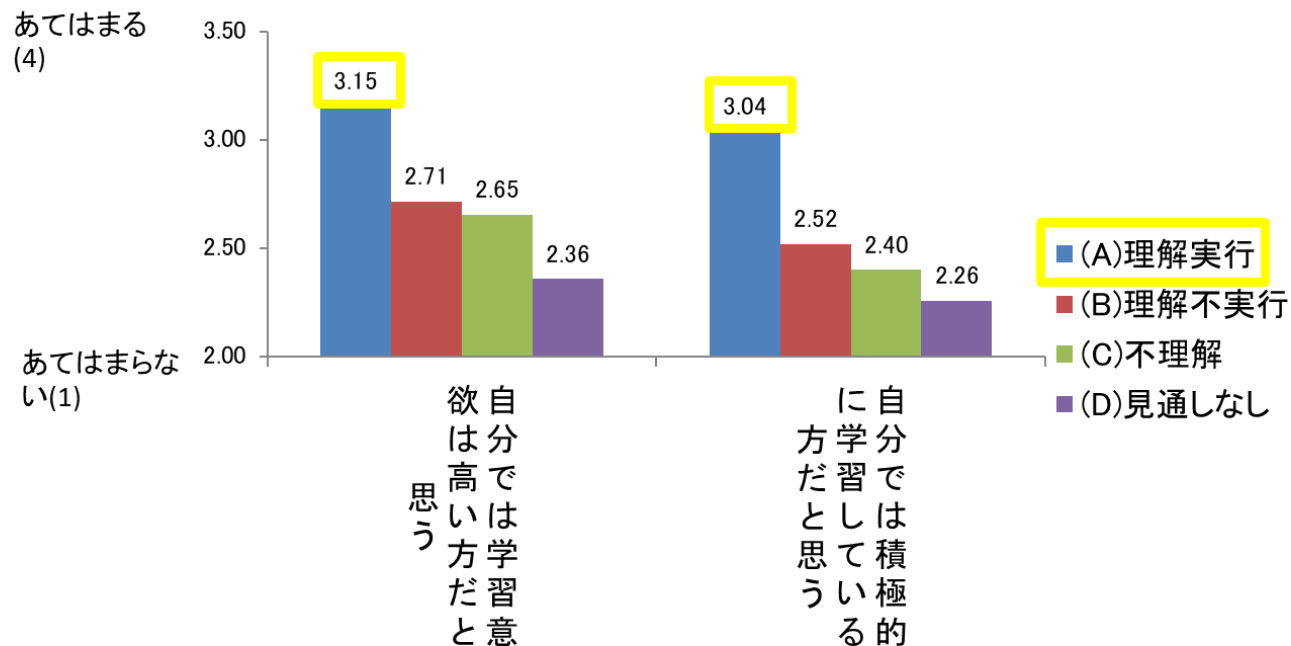
京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会共催『大学生のキャリア意識調査2007』より。全国の国公立私立大学生2,013名(1年生988人、3年生1,025人)。

詳しくは<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/> を参照

21

2014年9月26日報告スライド(東京会場)

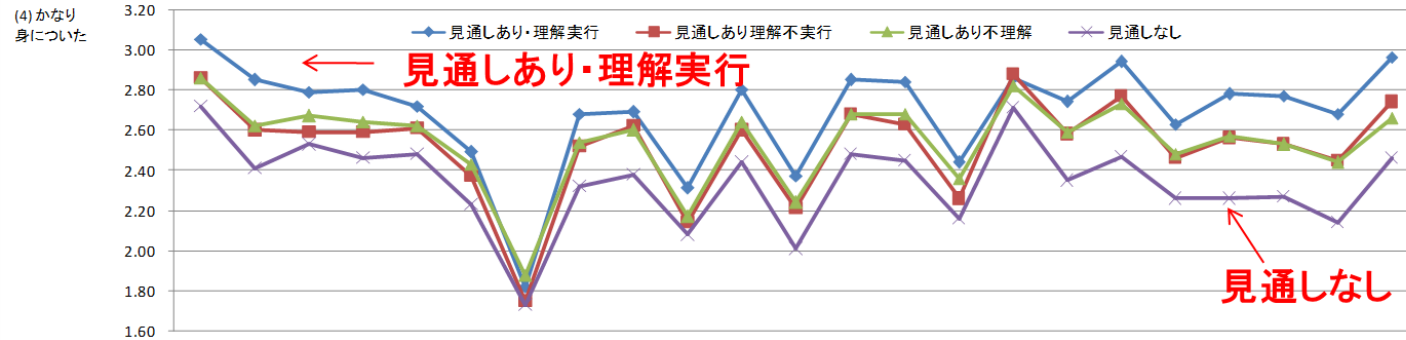
二つのライフは学習動機に影響を及ぼす



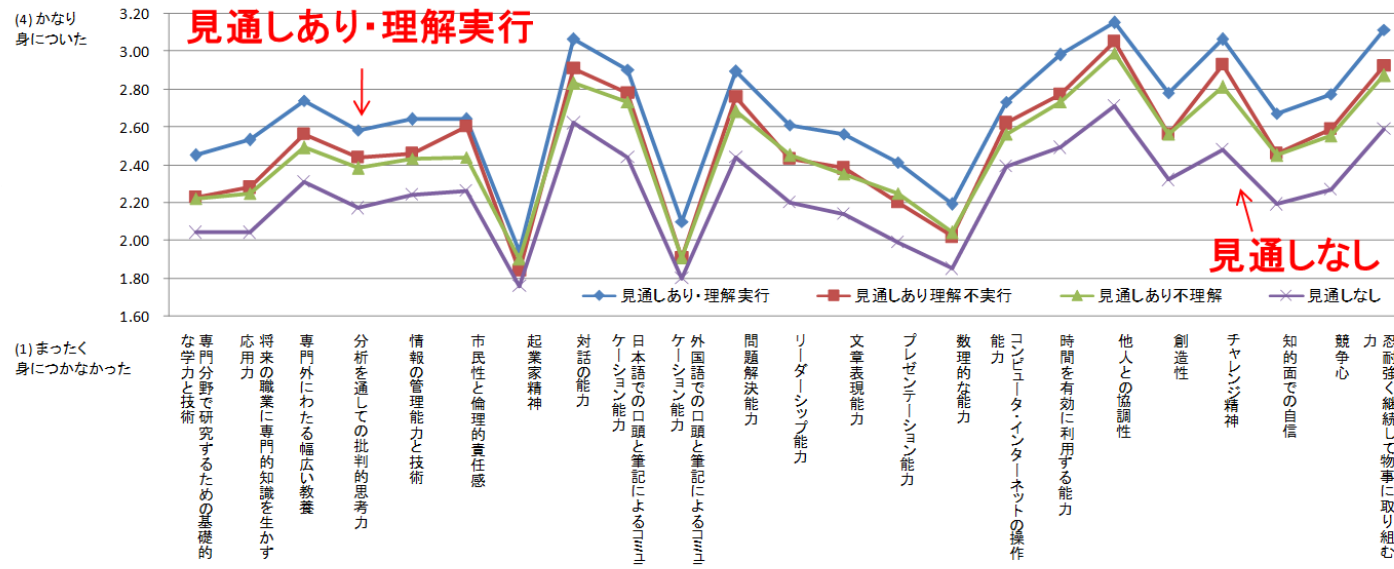
Slide22

2014年9月26日報告スライド(東京会場)

二つのライフ×知識・能力の獲得



a. 授業で身につけた知識・能力

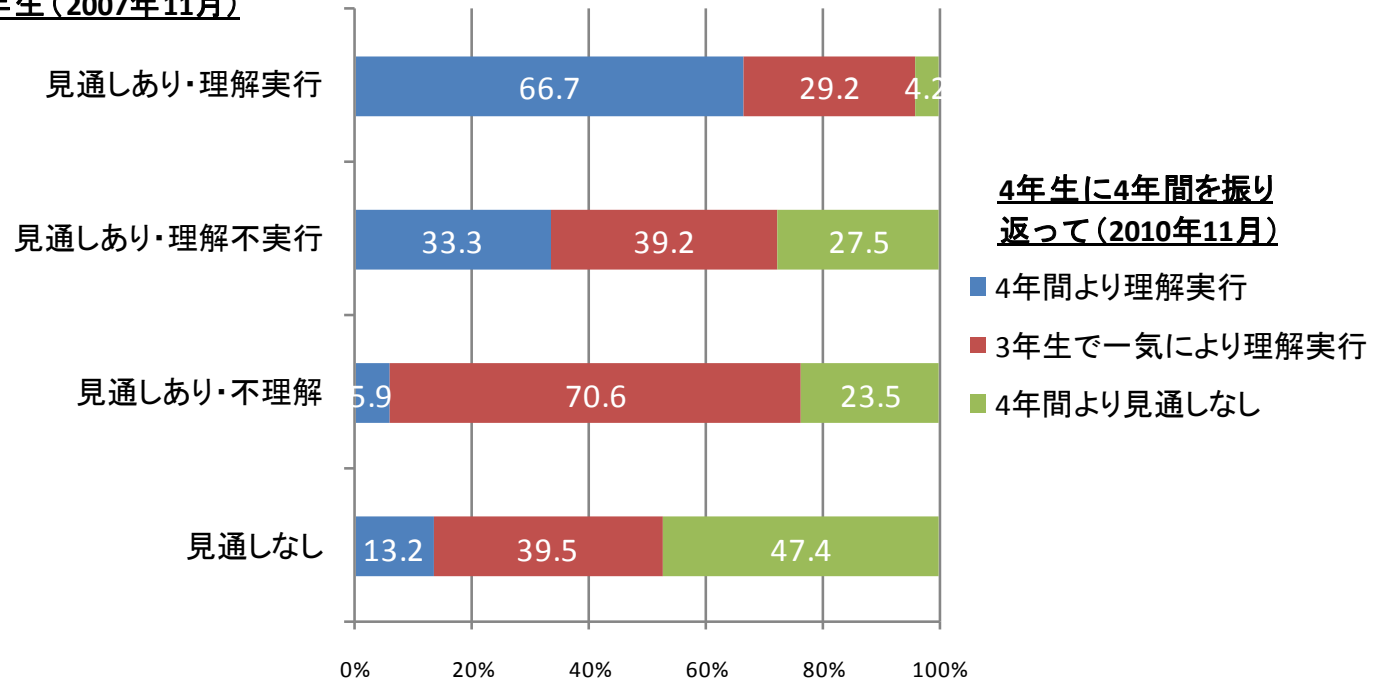


b. 授業外で身につけた知識・能力

23

2014年9月26日報告スライド(東京会場)

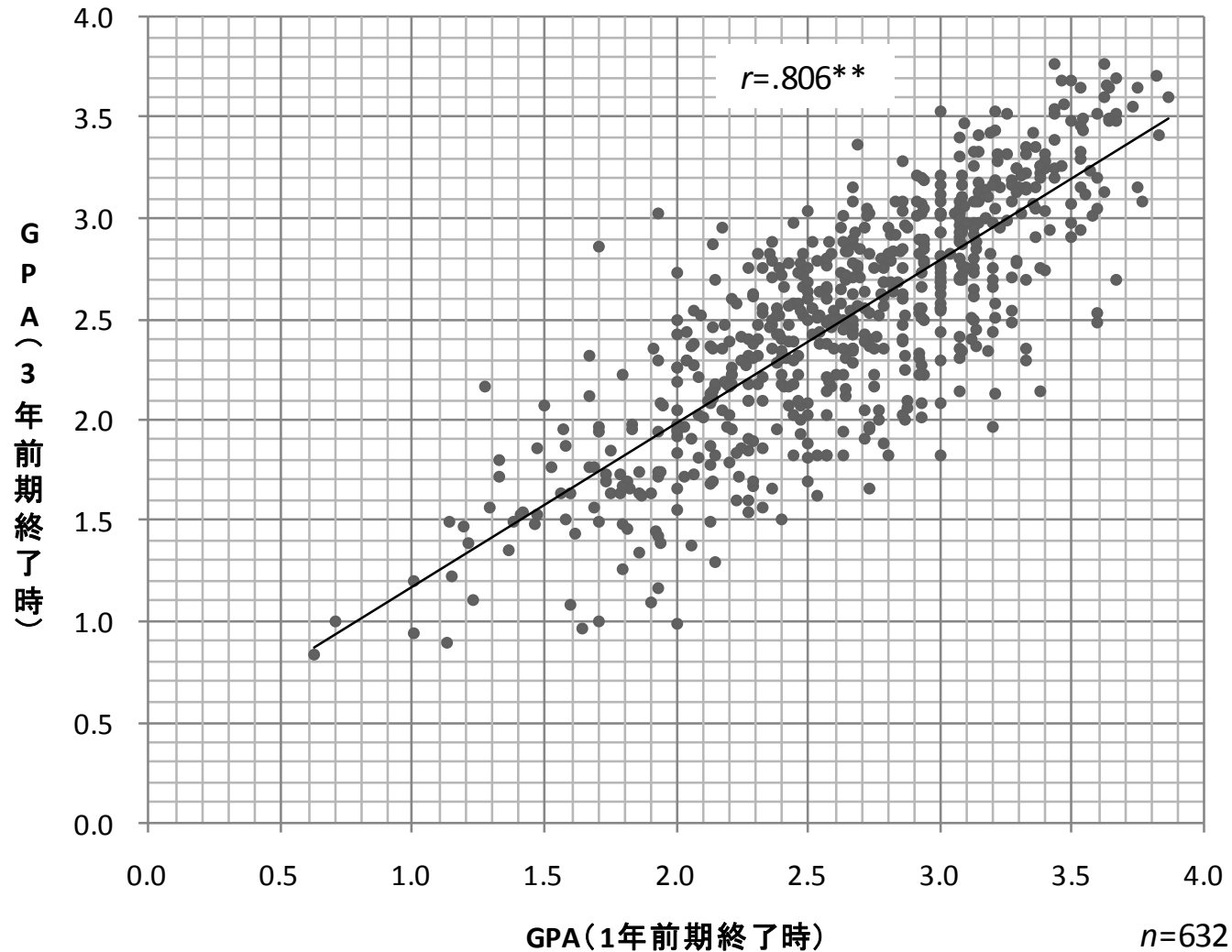
1年生(2007年11月)



4年生に4年間を振り返って(2010年11月)

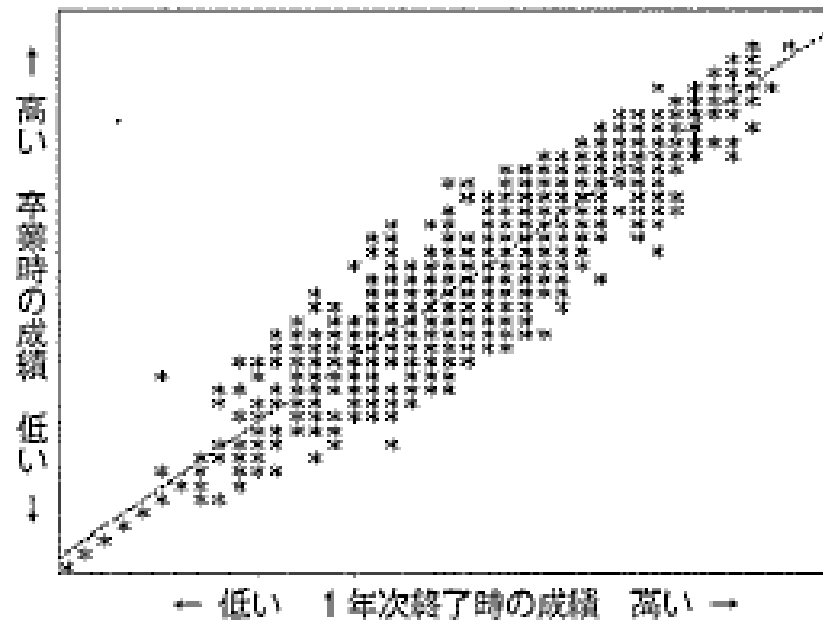
N=130

保田江美・溝上慎一 (2014). 初期キャリア以降の探究－「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジションー 東京大学出版会 pp.139-173



Reference

・溝上 慎一「経験や勘からデータ重視へと教学改善を跳躍させるIR」(進研アド『Between』2013年10-11月号)



【特別レポート】(東京理科大)

「大学卒業時の成績が入学後わずか2ヶ月後の出席状況と相関している」

*図は、成績の相関を示す

『学研・進学情報』2016年11月号 (pp.12-15)



(京都大学の授業より)



「学校と社会をつなぐ調査」概要

目的: 高校2年生から約10年の追跡調査をおこない、学校での学習や日常生活の過ごし方が、大学での学びや社会に出てからの仕事や人生の過ごし方にどのような影響を及ぼすかを検討する。

実施概要: 大学進学率約7-8割以上の高校(河合塾の資料より全国約1,500校の生徒を対象)を調査対象の母集団として設定し、全国都道府県教育委員会、高校に協力を要請して実施。教室での配布、インターネット、郵送等で、165,687名の高校生に調査票への回答を求め、結果、45,311名が回答(27.6%回答率)。

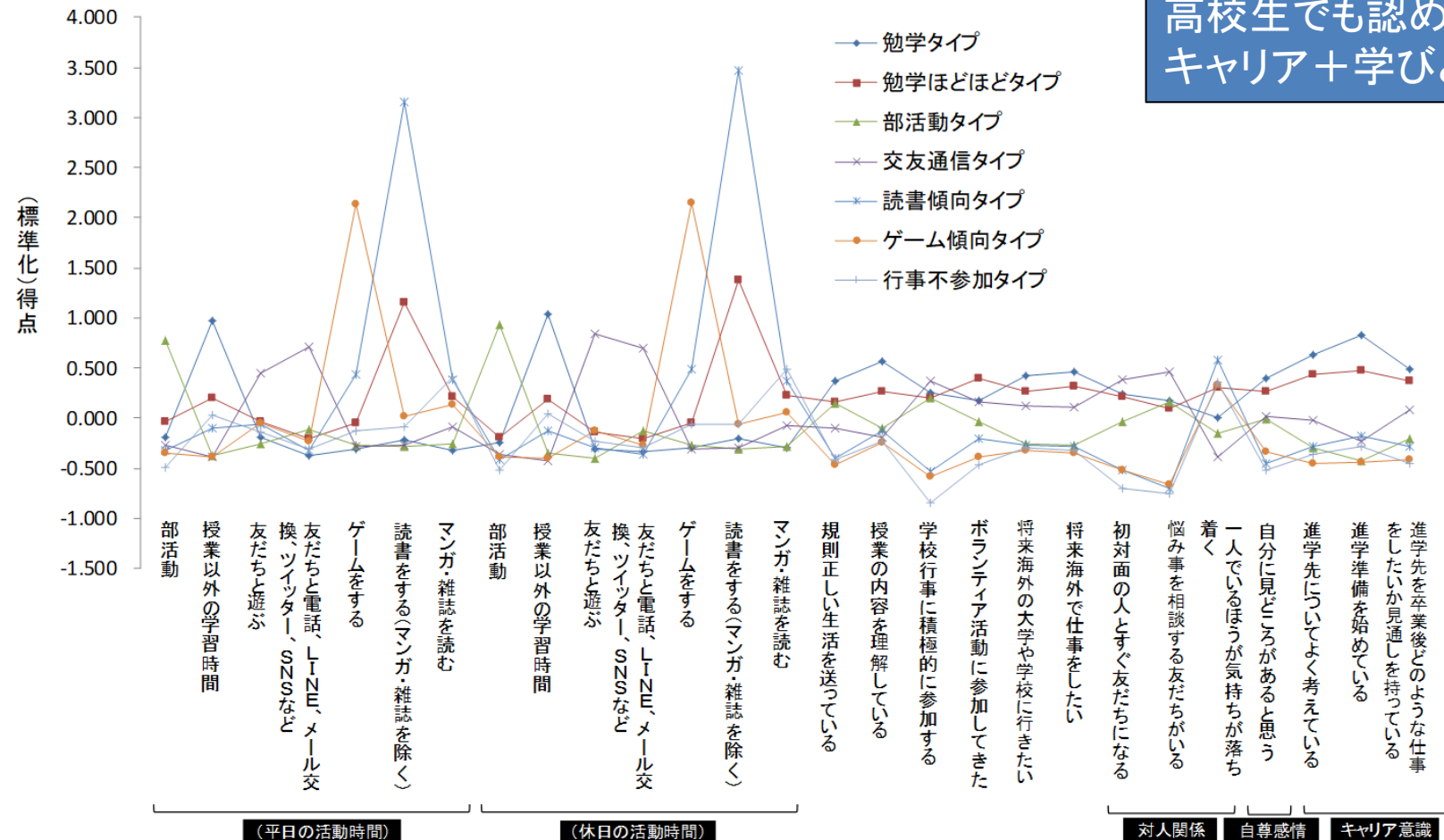
調査実施の流れ:



2

2014年9月26日報告スライド(東京会場)

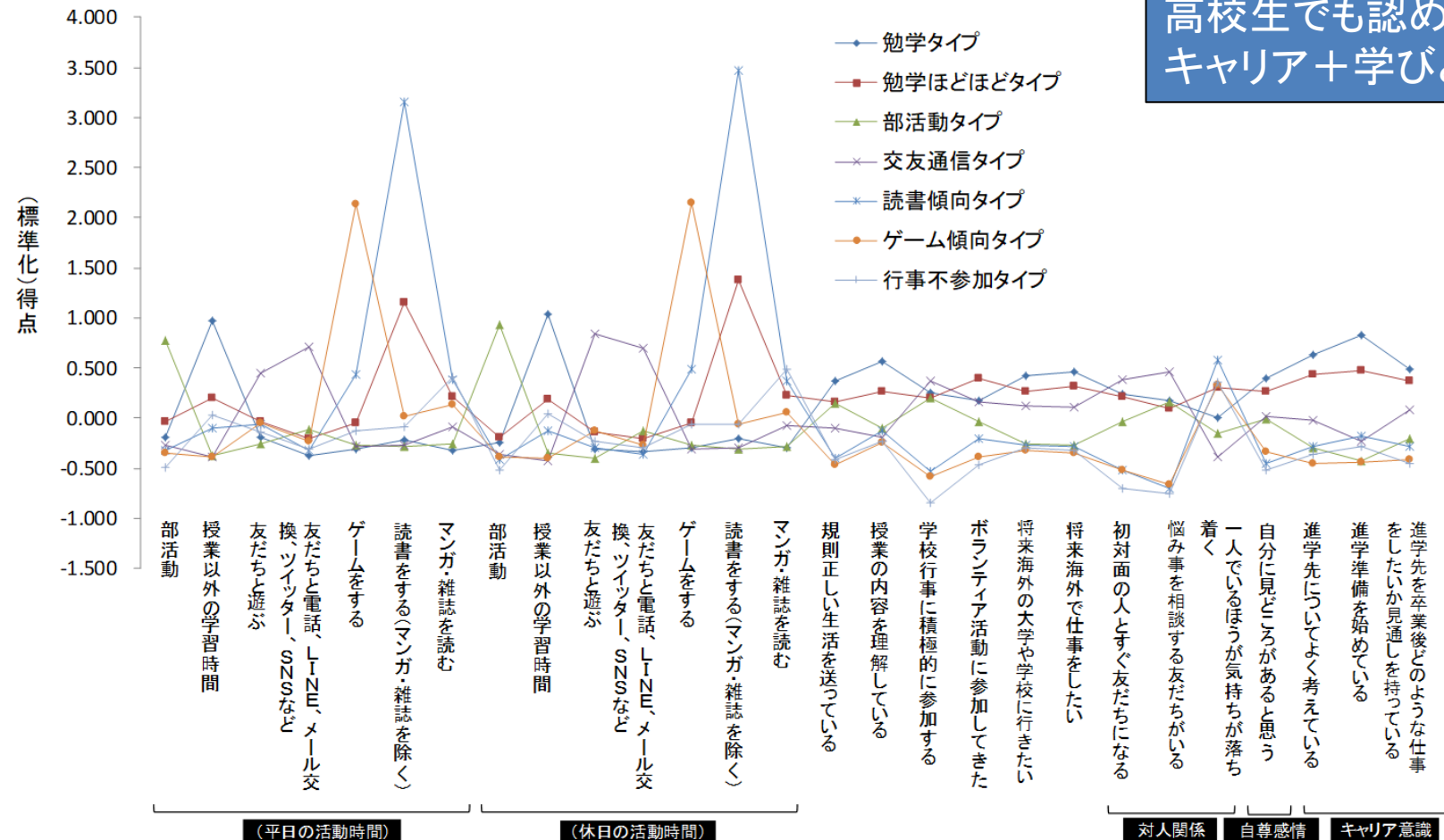
図 高校生の7タイプ



大学生と同じ知見が
高校生でも認められる
キャリア+学びと成長

クラスタ分析 (K-means法)

図 高校生の7タイプ



大学生と同じ知見が
高校生でも認められる
キャリア+学びと成長

クラスタ分析 (K-means法)

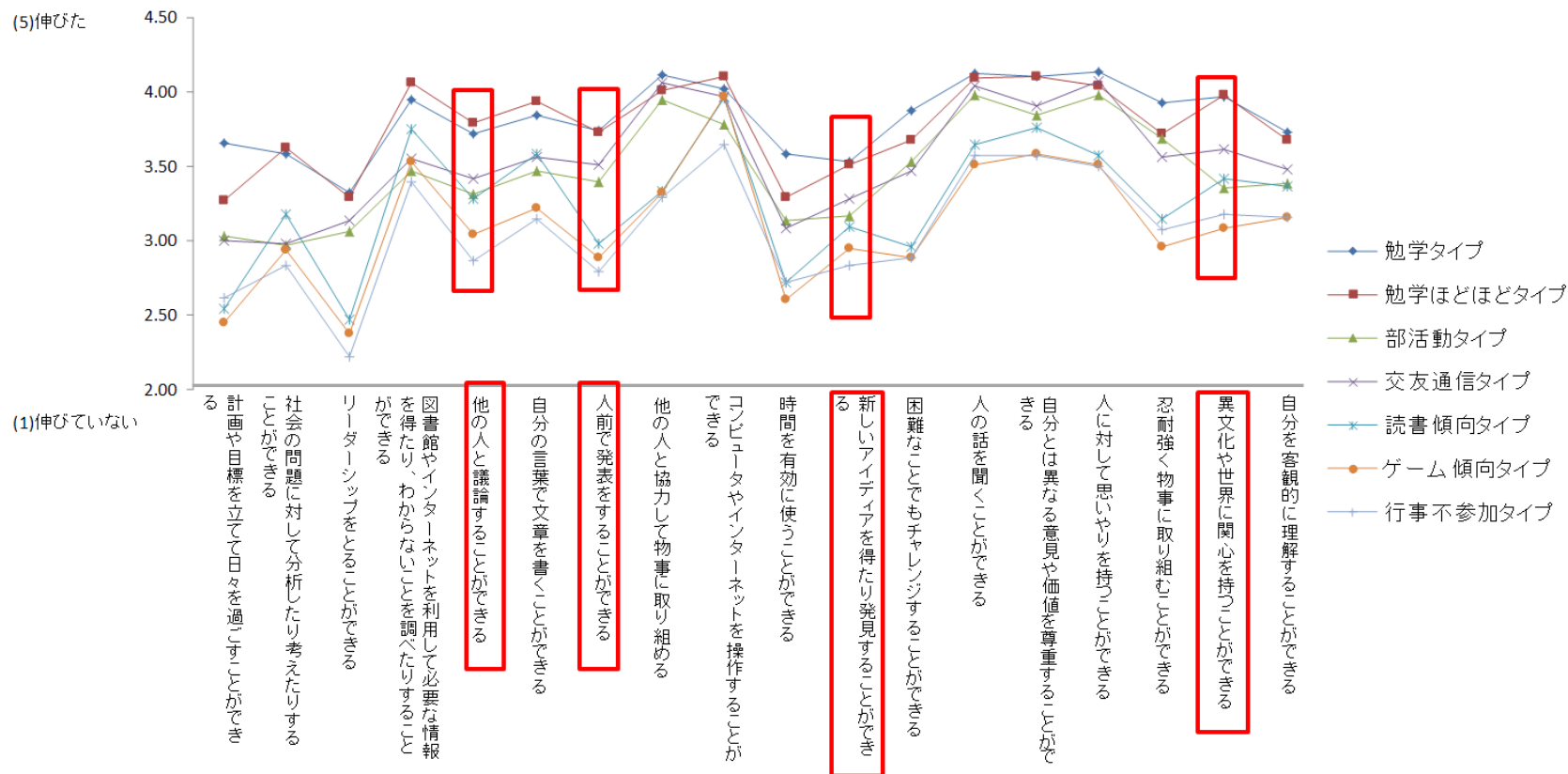
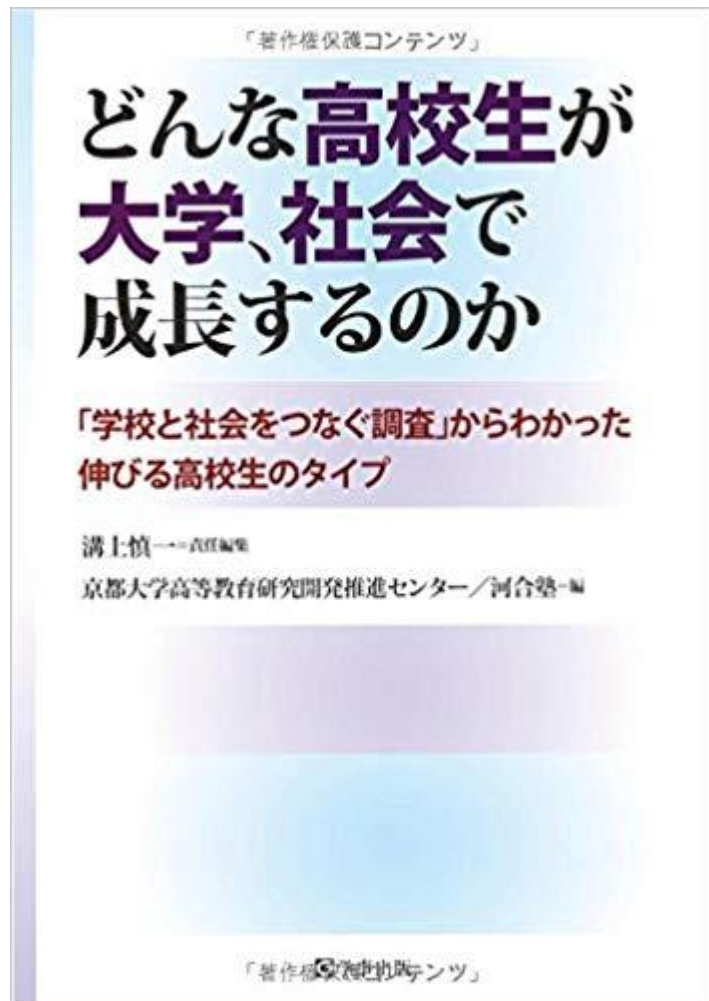


図 生徒タイプと技能・態度の伸びとの関連

- ・「他の人と議論することができる」「人前で発表することができる」は、対人関係が得意くらいでは身につかない。学習（アクティブラーニング）との深い関連性。
- ・「異文化や世界に関心を持つ」も学習と関連。



溝上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究
開発推進センター・河合塾（編）（2015）. どんな
高校生が大学、社会で成長するのかー「学校
と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校
生のタイプー 学事出版



溝上慎一監修 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編) (2018年2月)

『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』 学事出版

第1章 10年トランジション調査の前史

第2章 10年トランジション調査の2時点目(大学1年時)までの成果

第3章 高大接続と受け入れる大学側の観点から結果をどう見るか

第4章 トランジションの研究成果に基づいた高校の実践事例(京都市立塔南高等学校・神奈川県私立桐蔭学園)



大学4年時調査(大4):

2018年11-12月にウェブ上で実施。分析対象者は、大1で4年制あるいは6年制の大学へ現役で進学しており、調査に回答した2,742名(男性996名、女性1,731名回答拒否等その他15名)である。高2で継続調査を承諾した人の16.3%に相当する。なお、大学1年時調査で浪人していた人は1年ないしは2年遅れで追跡調査をしており、本調査の最終年度の分析で総合的に報告する予定である。

分析対象者の専門分野

1	人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)	633 (23.1)
2	社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)	651 (23.7)
3	理科系(理学・工学・農学など)	789 (28.8)
4	芸術系(美術・音楽・デザイン学など)	61 (2.2)
5	1～4以外の文科系でもあり理科系でもある	92 (3.4)
6	4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)	308 (11.2)
7	6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)	165 (6.0)
8	その他	37 (1.3)
	未記入	6 (0.2)
計		2,742 (100.0)



資質・能力の変化

手続き

高2～大4までの4つの資質・能力

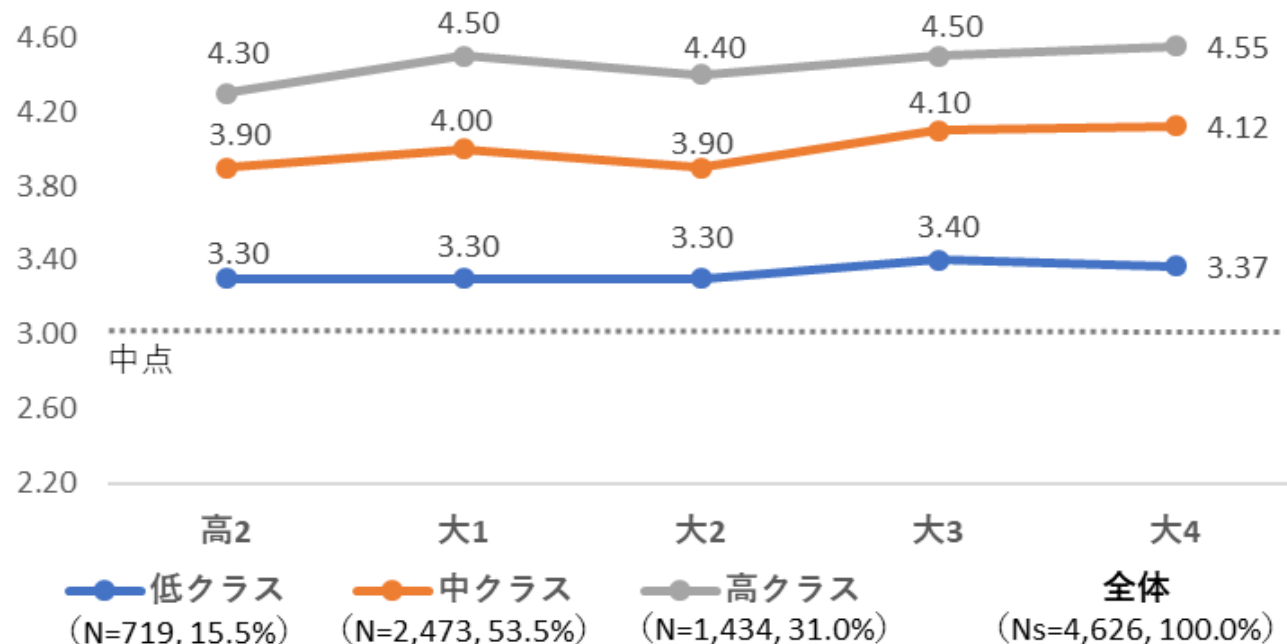
- ・他者理解力
- ・計画実行力
- ・コミュニケーション・リーダーシップ力
- ・社会文化探究心

の得点を用いて、いくつかの成長クラスを抽出するべく潜在クラス成長分析をおこなった。分析にはM-Plus version 7.4を使用した。

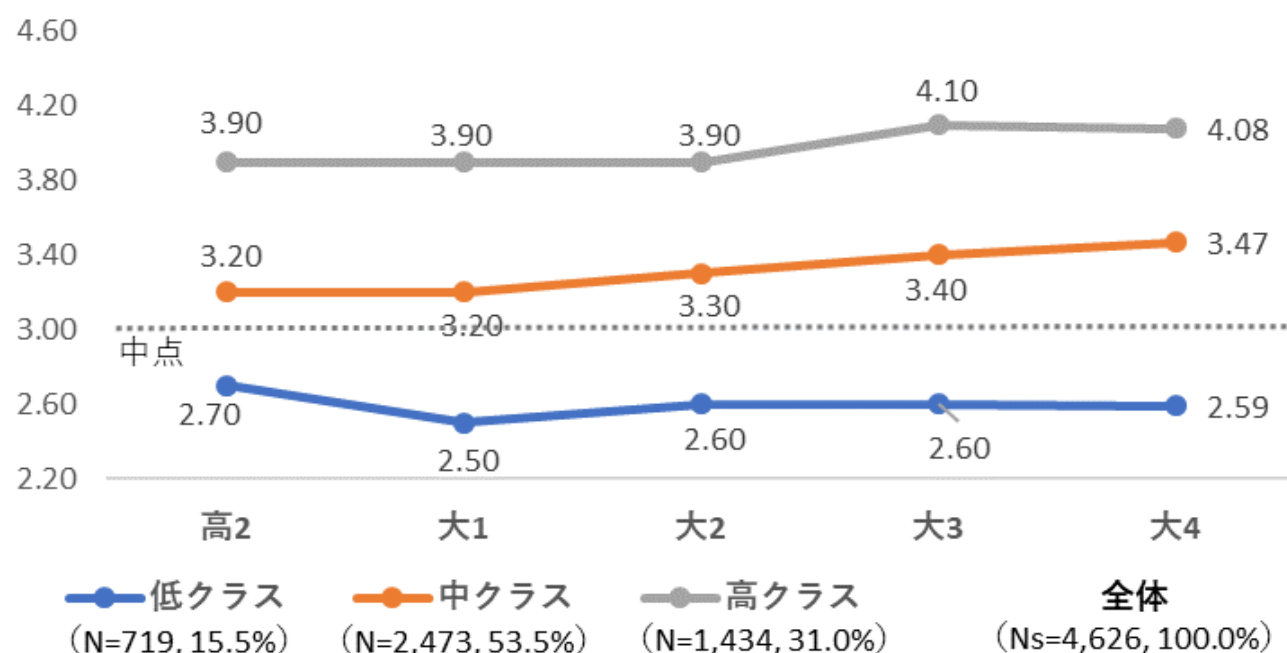
潜在クラス成長分析によるモデル適合度

Solution	BIC	BLRT	Entropy	Trajectory group prevalence (%)			
				1	2	3	4
Class 2	162293.02	$p < .001$	0.84	40.8	59.2		
Class 3	158426.17	$p < .001$	0.82	52.3	31.7	16.0	
Class 4	156804.08	$p < .001$	0.79	29.2	6.5	45.9	18.5

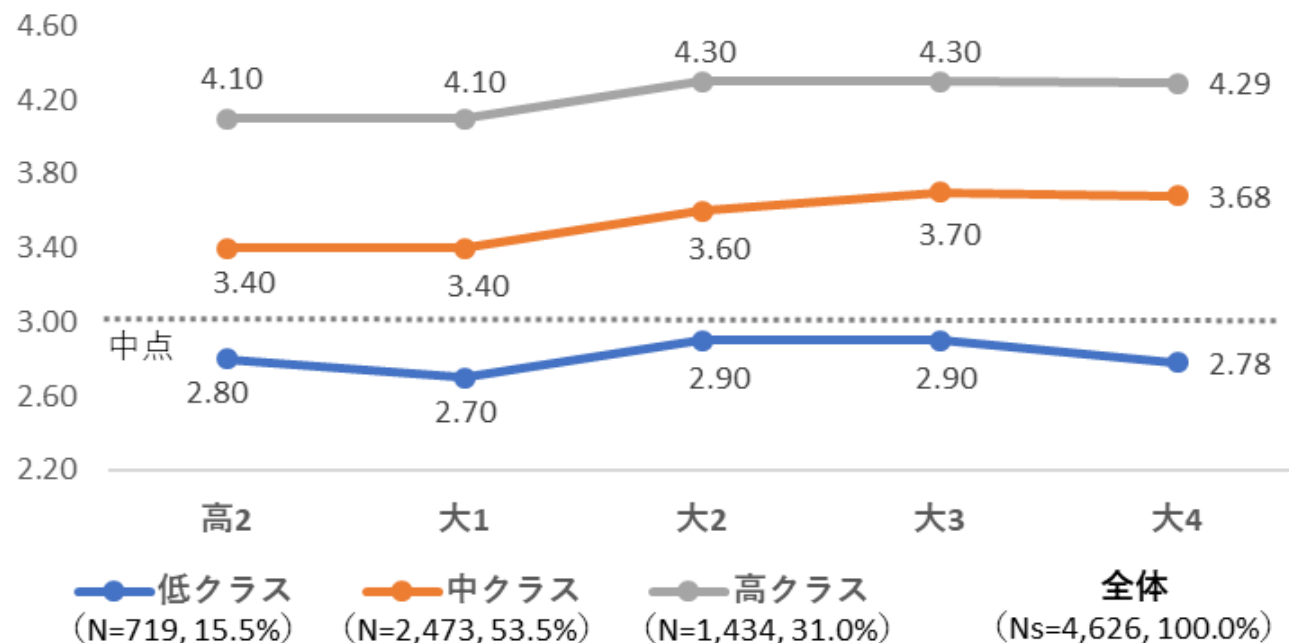
他者理解力



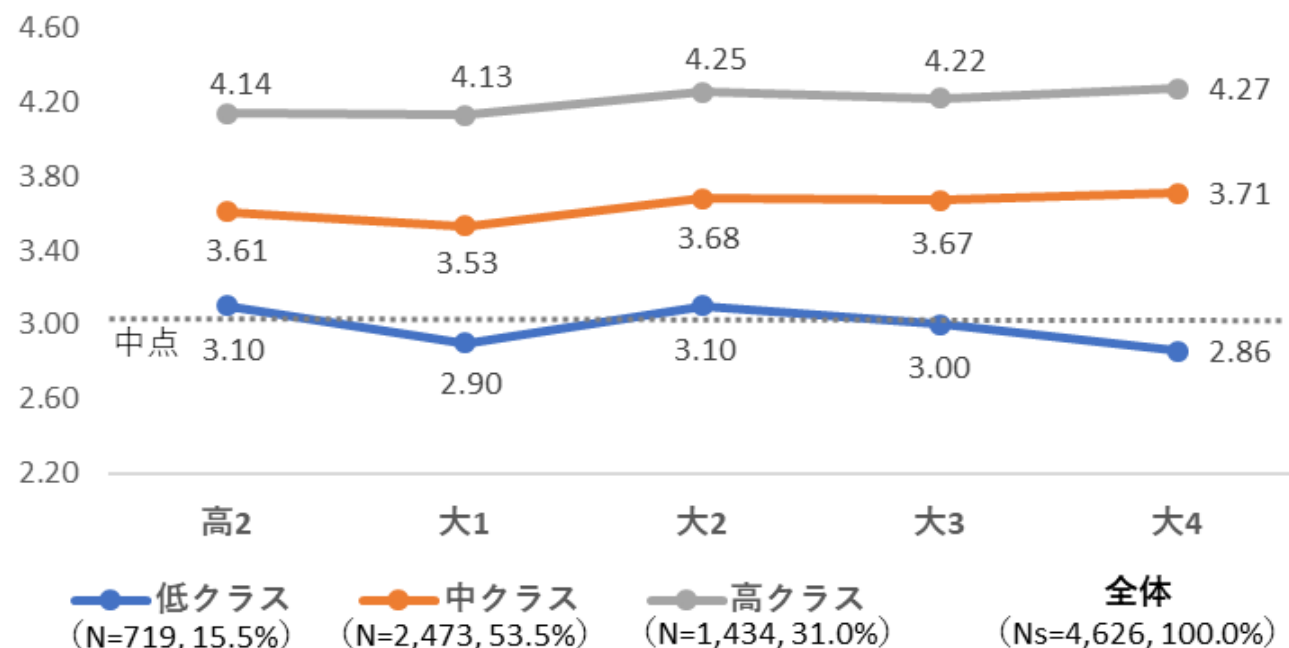
計画実行力



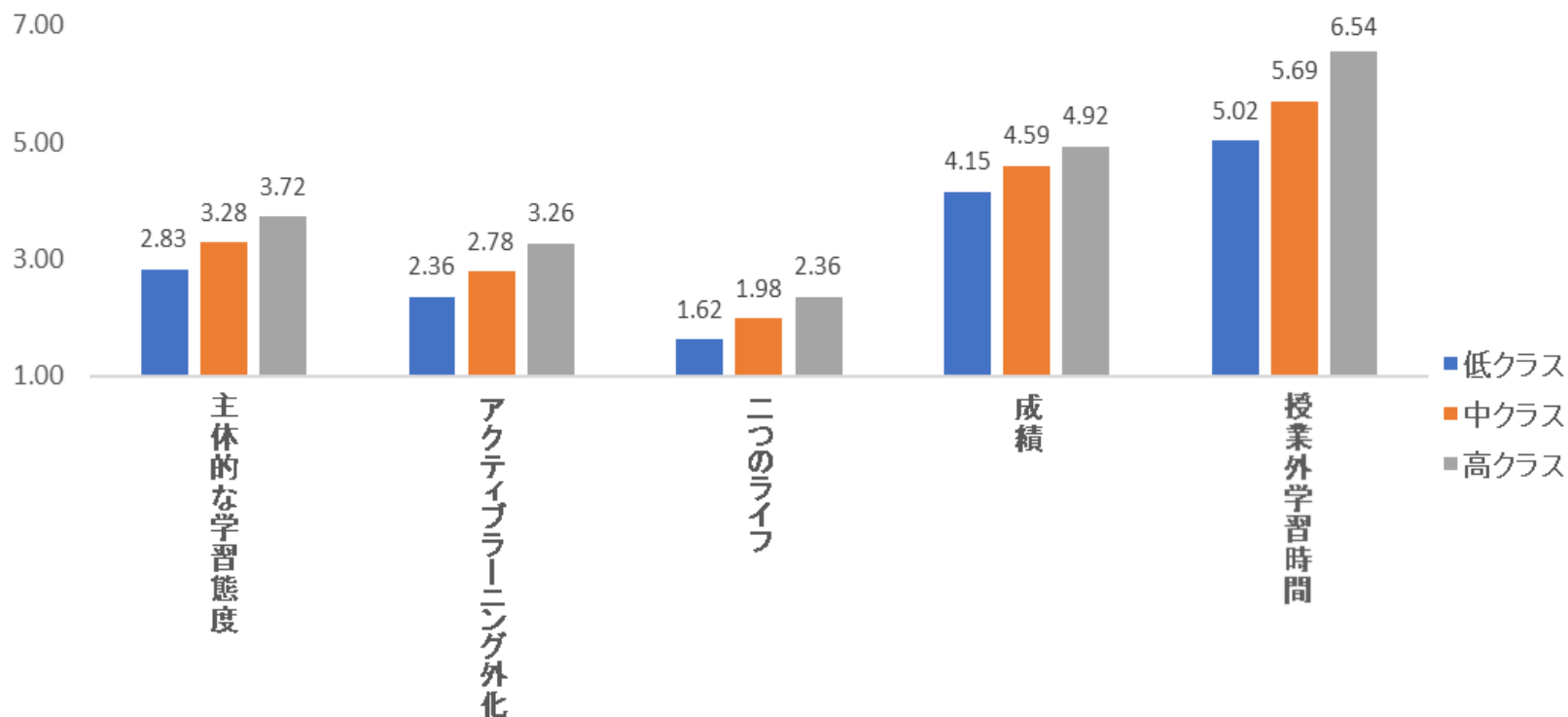
コミュニケーション・リーダーシップ力



社会文化探究心



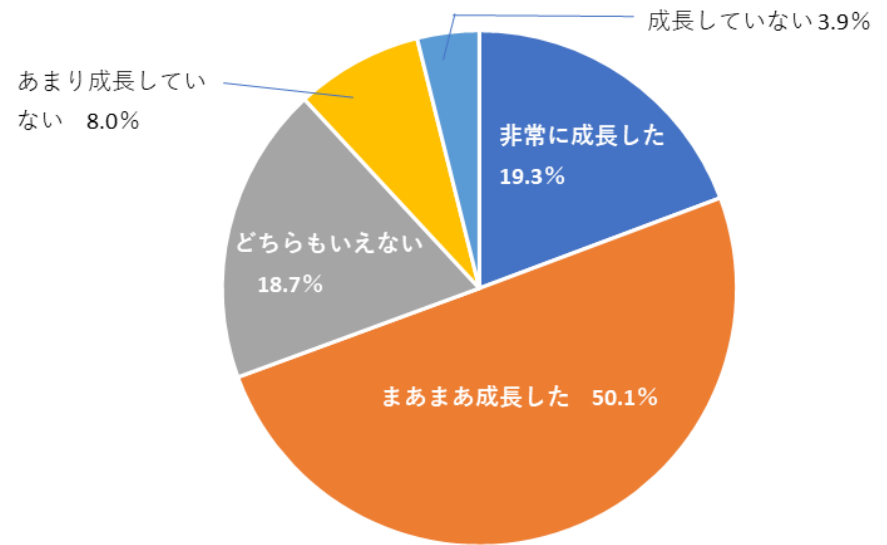
(大3)クラス×各変数



		得点レンジ	全体	低クラス	中クラス	高クラス	一要因分散分析	効果量(η^2)
			N=3,084-3,194	N=455-487	N=1,620-1,683	N=1,009-1,024		
大 学 3 年 時	主体的な学習態度	1-5	3.35 (0.75)	2.83 (0.76)	3.28 (0.68)	3.72 (0.67)	$F(2,3179)=292.933, p<.001$	.16(大)
	アクティブラーニング外化	1-4	2.87 (0.69)	2.36 (0.74)	2.78 (0.61)	3.26 (0.56)	$F(2,3170)=389.249, p<.001$	.20(大)
	ニつのライフ	1-3	2.05 (0.77)	1.62 (0.71)	1.98 (0.76)	2.36 (0.68)	$F(2,3169)=182.594, p<.001$	.10(中)
	成績	2-6	4.63 (1.16)	4.15 (1.33)	4.59 (1.12)	4.92 (1.04)	$F(2,3081)=74.983, p<.001$	.05(小)
	授業外学習時間	0-74	5.86 (6.71)	5.02 (5.94)	5.69 (6.48)	6.54 (7.32)	$F(2,3191)=9.710, p<.001$	.01(無)

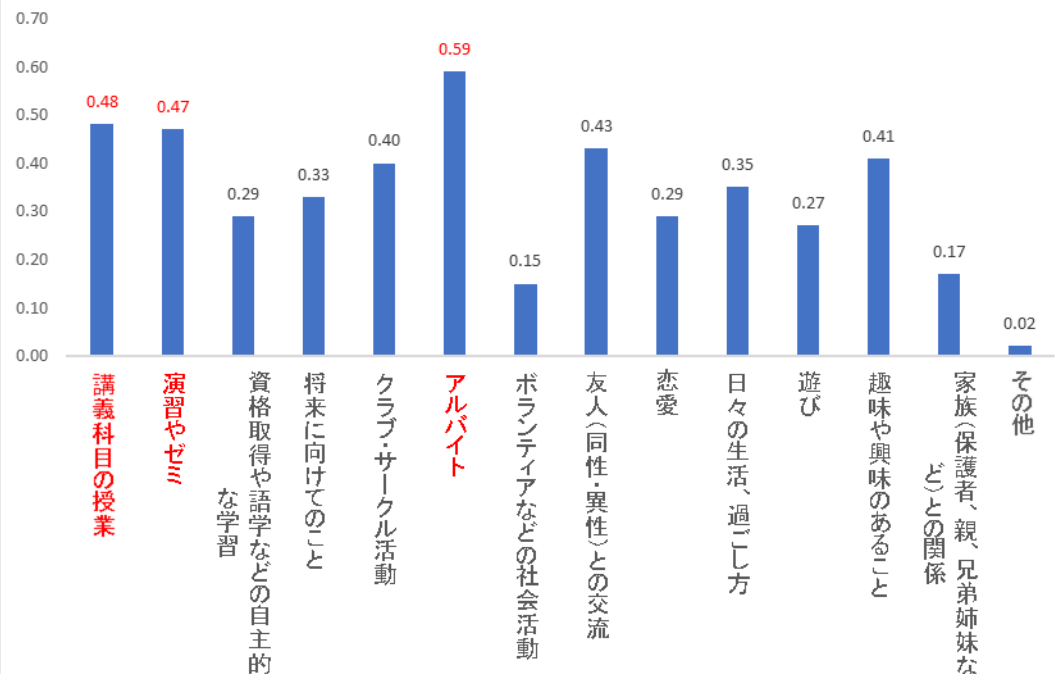
(補完調査)全国大学生3・4年生調査(N=2,062人)(未公開)

Q「あなたは大学生になって以降、全体的にどの程度成長したと感じますか。」



Q “非常に”“まあまあ成長した”と回答した人にお尋ねします。

「あなたの成長に関連する活動や関係はどのようなものですか。」



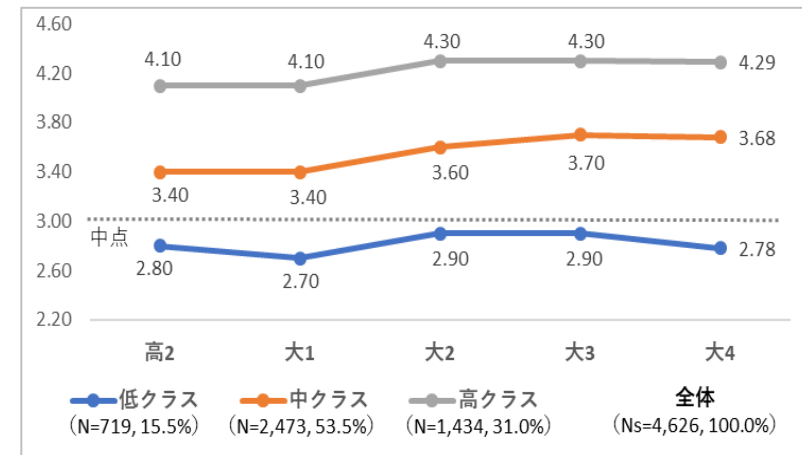
「成長」「発達」を見分ける

①発達 (psychological development)

児童期や青年期において課題となるある方向性をもった変化やプロセス

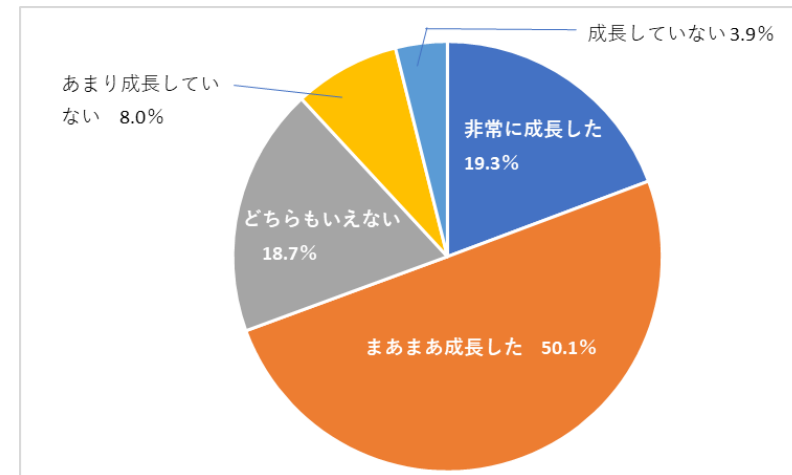
(例 児童期) 勤勉であること、友人関係(社会的広がり)など

(例 青年期) 形式的操作、自身の価値観、アイデンティティ形成、親密性(異性やパートナー)など



②成長 (development)

- ・生じること
- ・単純から複雑へ進歩すること
- ・あるテーマをつくりあげること
- ・開くこと
- ・より発展した状態へと移行すること



新人の業務

- 顧客ニーズのヒアリング
- 見込み客の開拓
- 顧客訪問に向けた情報収集

一人前の業務

- 顧客ニーズのヒアリング
- 見込み客の開拓
- 顧客に対する企画提案のプレゼンテーション

ベテラン

- 営業職・営業事務職等の指導・育成
- 営業教育の企画
- 営業活動予算の申請・管理
- 営業戦略の検討
- ターゲット市場の選定や割り当て
- 商品・サービスの流通販売ルートの検討
- 契約内容の審査・確認

成長の領域

発達の領域



他者理解力

計画実行力

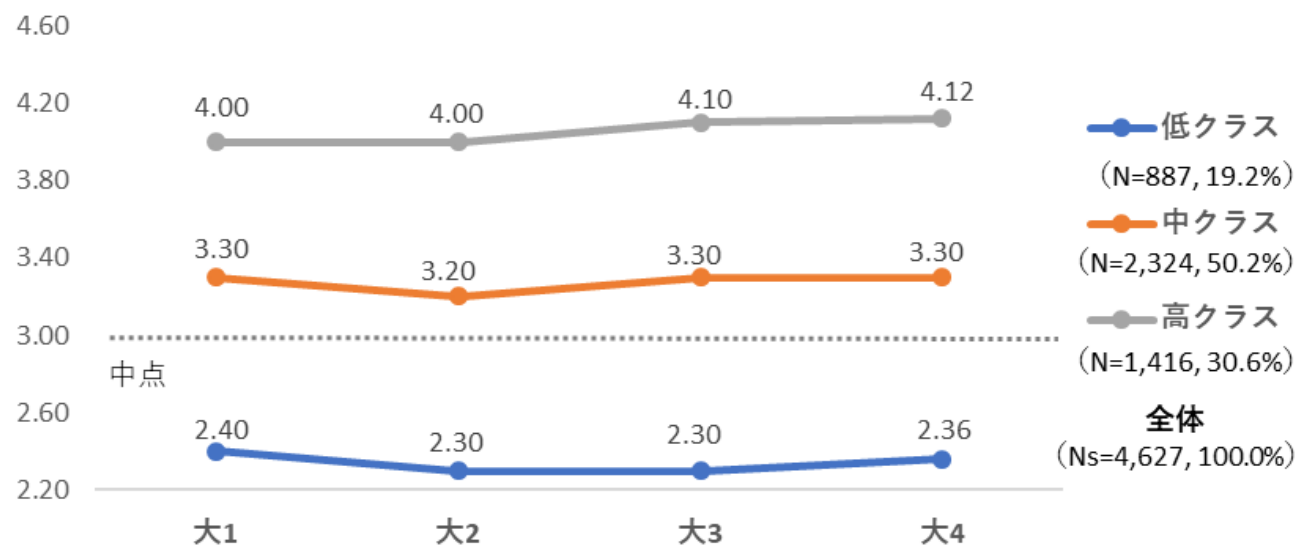
コミュニケーション・
リーダーシップ力

社会文化探究心

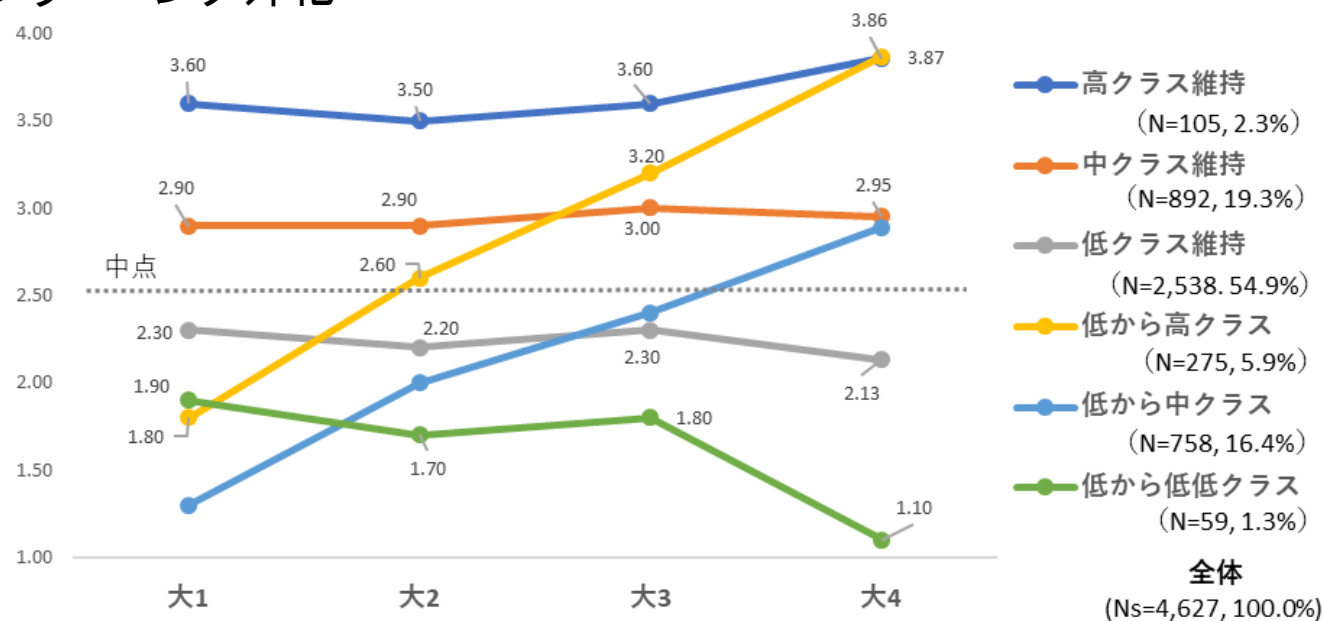
潜在変数

主体的な学習、アクティブラーニング(外化) 二つのライフ(キャリア意識)の変化

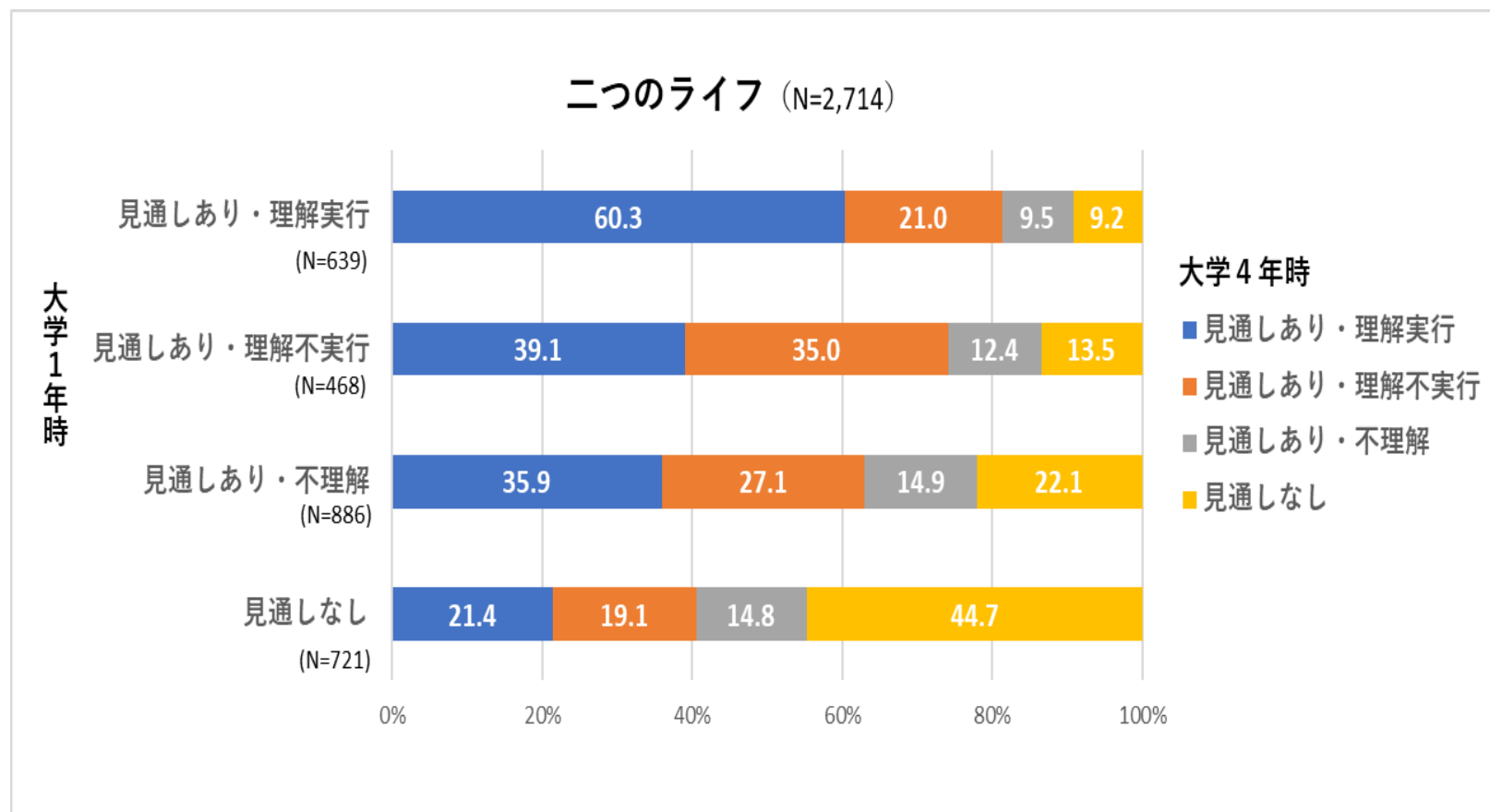
主体的な学習態度



アクティブラーニング外化

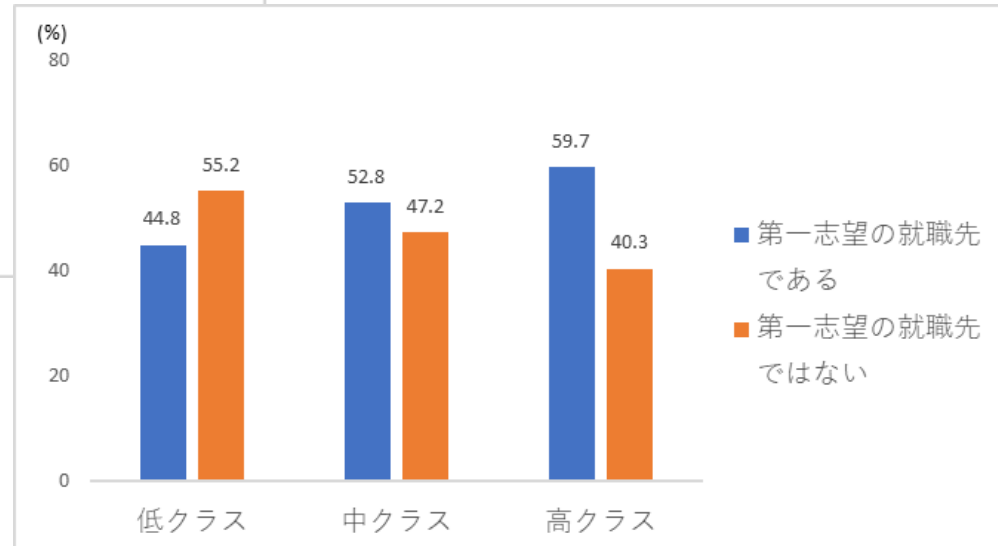
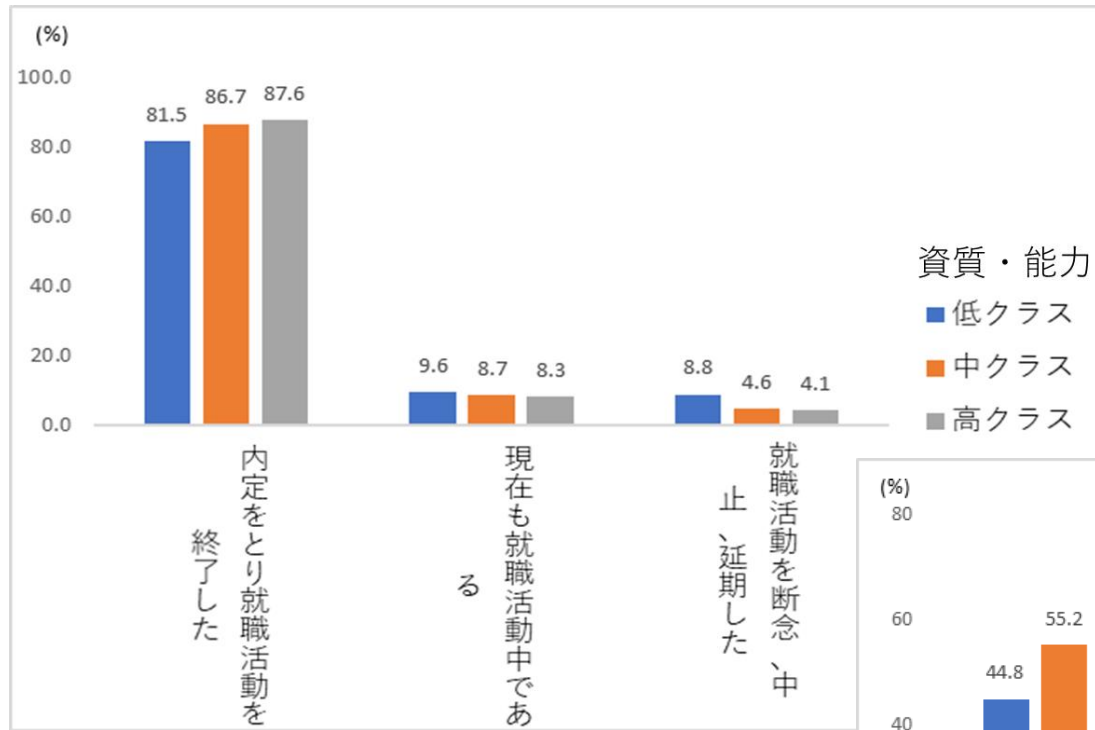


二つのライフ(将来の見通し+理解実行)(キャリア意識)



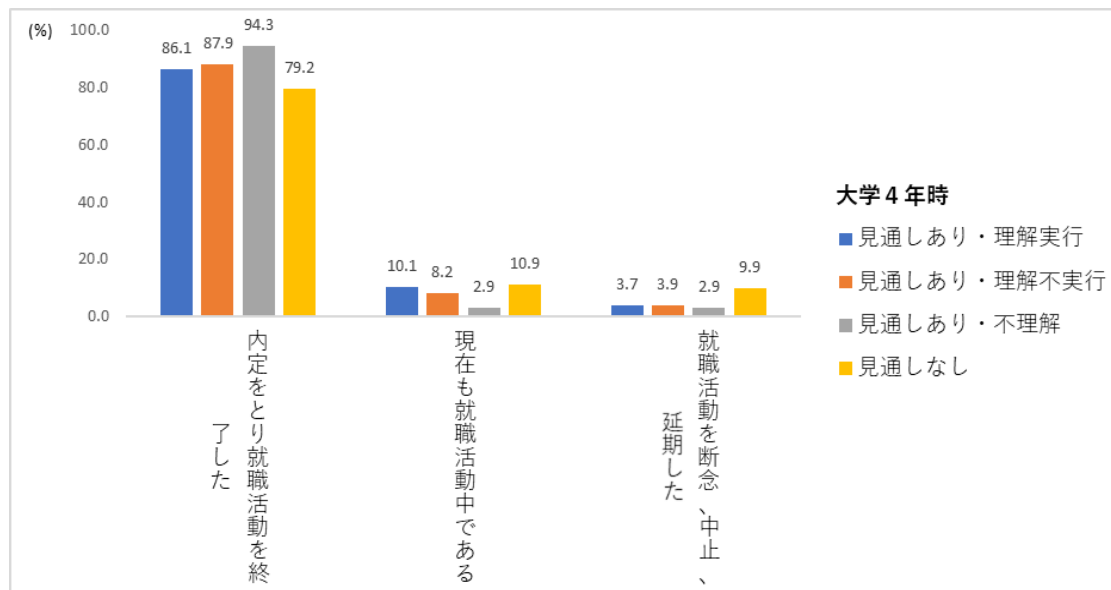
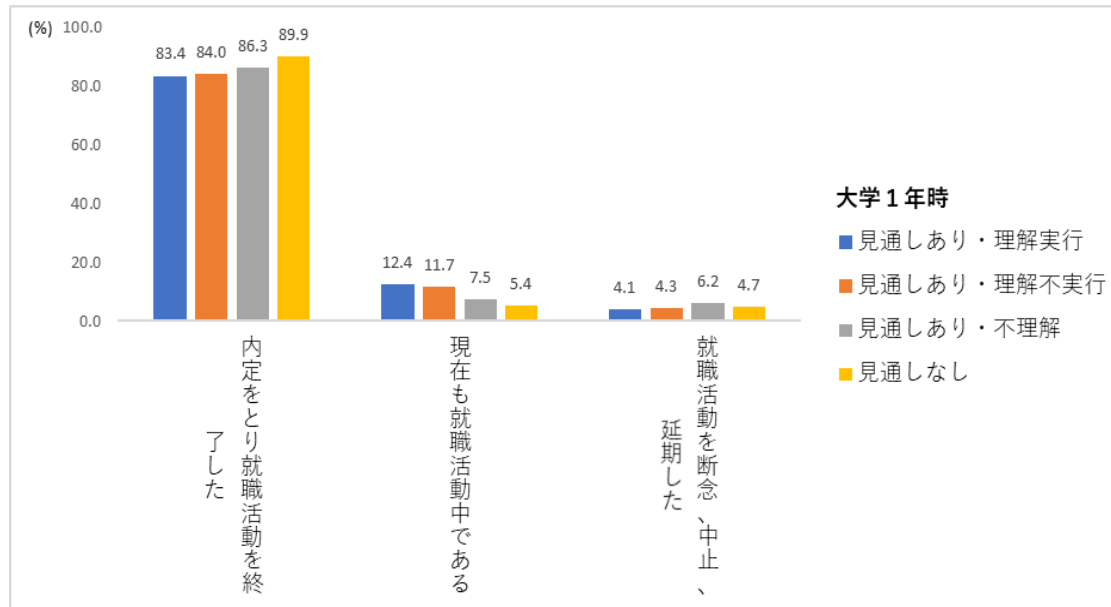
就職活動との関連

資質・能力と就職活動の関連



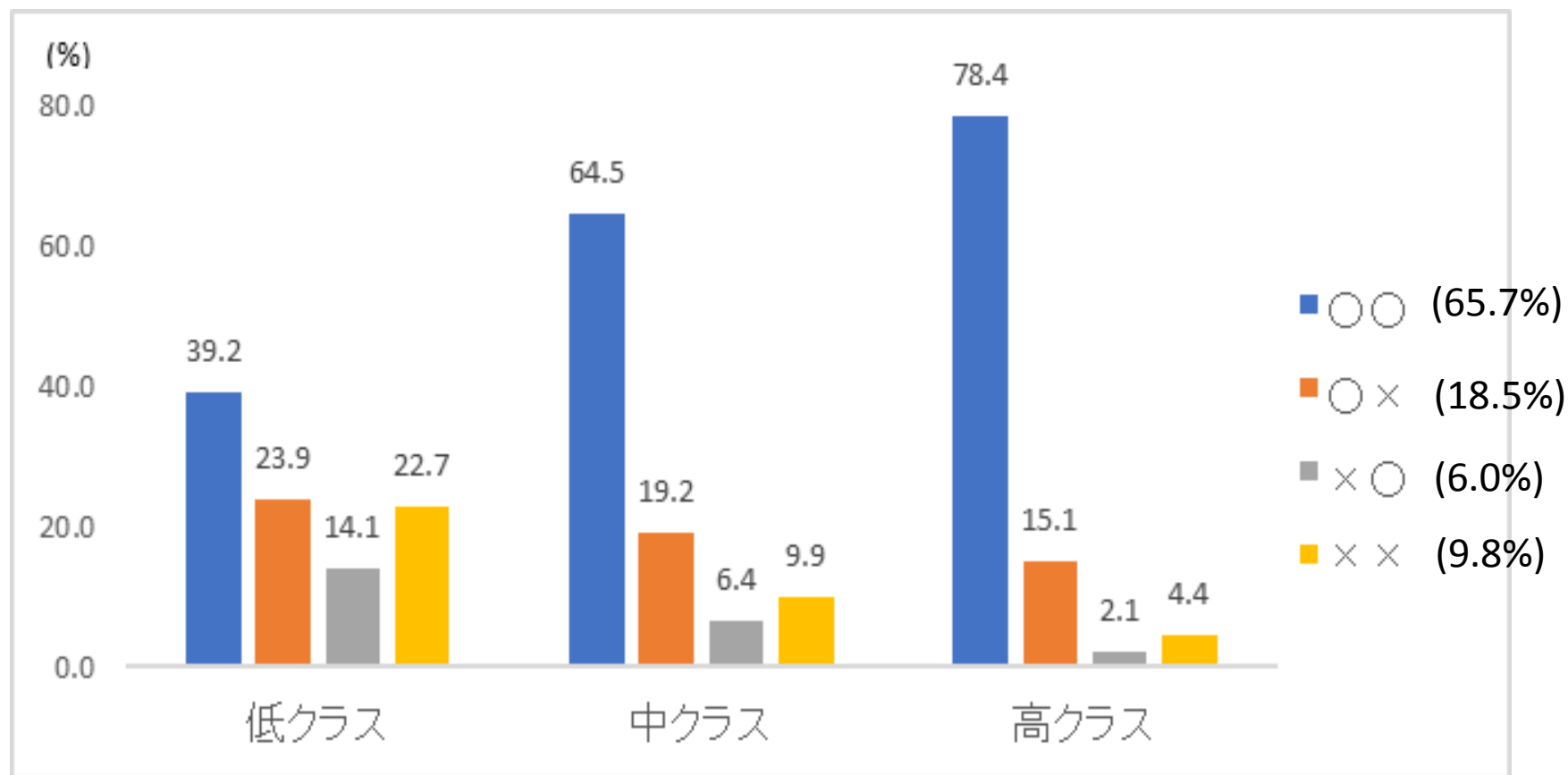
有意差は見られたが、効果量は無し。
→関連は統計的には認められない。

二つのライフと就職活動の関連



有意差は見られたが、効果量は無し。
→関連は統計的には認められない。

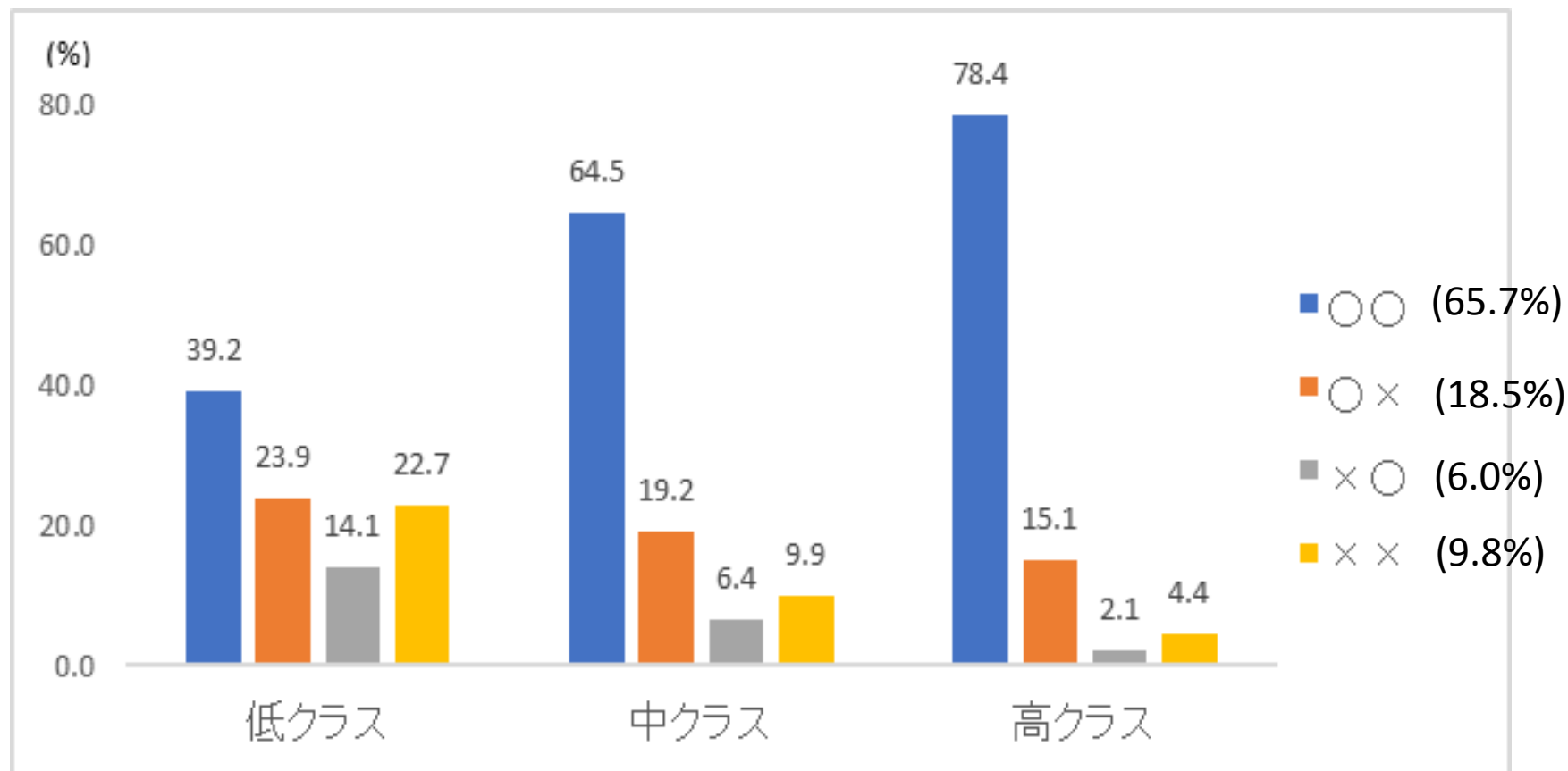
大学時代・就職活動の評価(肯定的○ 否定的×)



$\chi^2(6)=158.610, p<.01, \text{Cramer's } V=.21$ (効果量小)

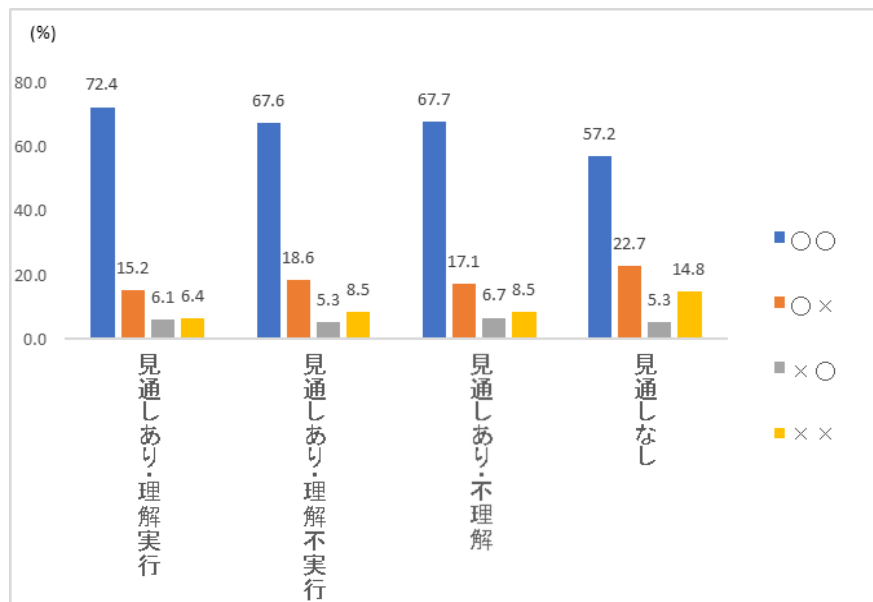
大学時代・就職活動の評価(肯定的○ 否定的×)

資質・能力との関連



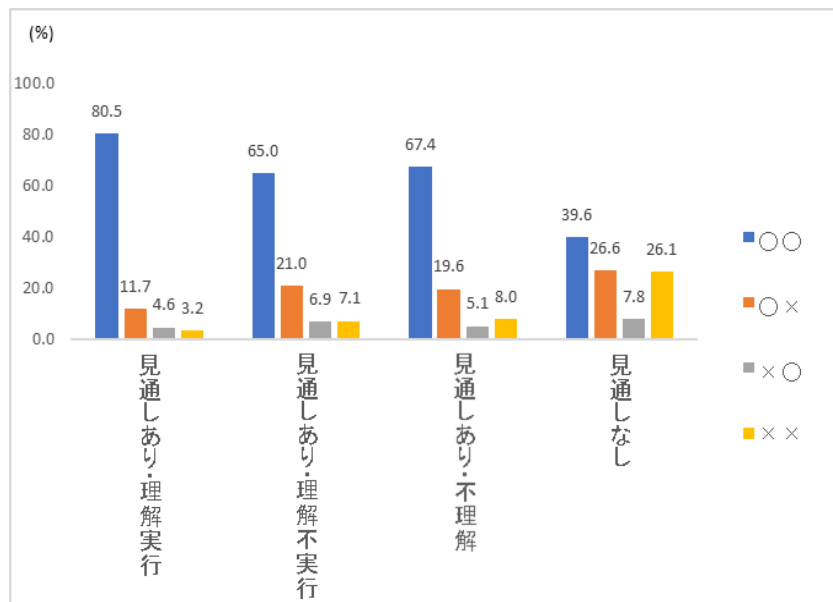
$\chi^2(6)=158.610, p<.01, \text{Cramer's } V=.21$ (効果量小)

二つのライフとの関連



<大学1年時の二つのライフ>

$\chi^2(9)=38.329, p<.001, \text{Cramer's } V=.08$ (効果量なし)



<大学4年時の二つのライフ>

$\chi^2(9)=246.849, p<.001, \text{Cramer's } V=.21$ (効果量小)

大学時代・就職活動の肯定的・否定的評価(○×)の理由で多く見られた3つ

(1) 大学時代○の理由

- ✓友人関係に恵まれた
- ✓さまざまな人や価値観にふれた
- ✓勉強を頑張った

(2) 大学時代×の理由

- ✓だらだら過ごしていた
- ✓やりたいことや目的意識がなかった
- ✓勉強しなかった

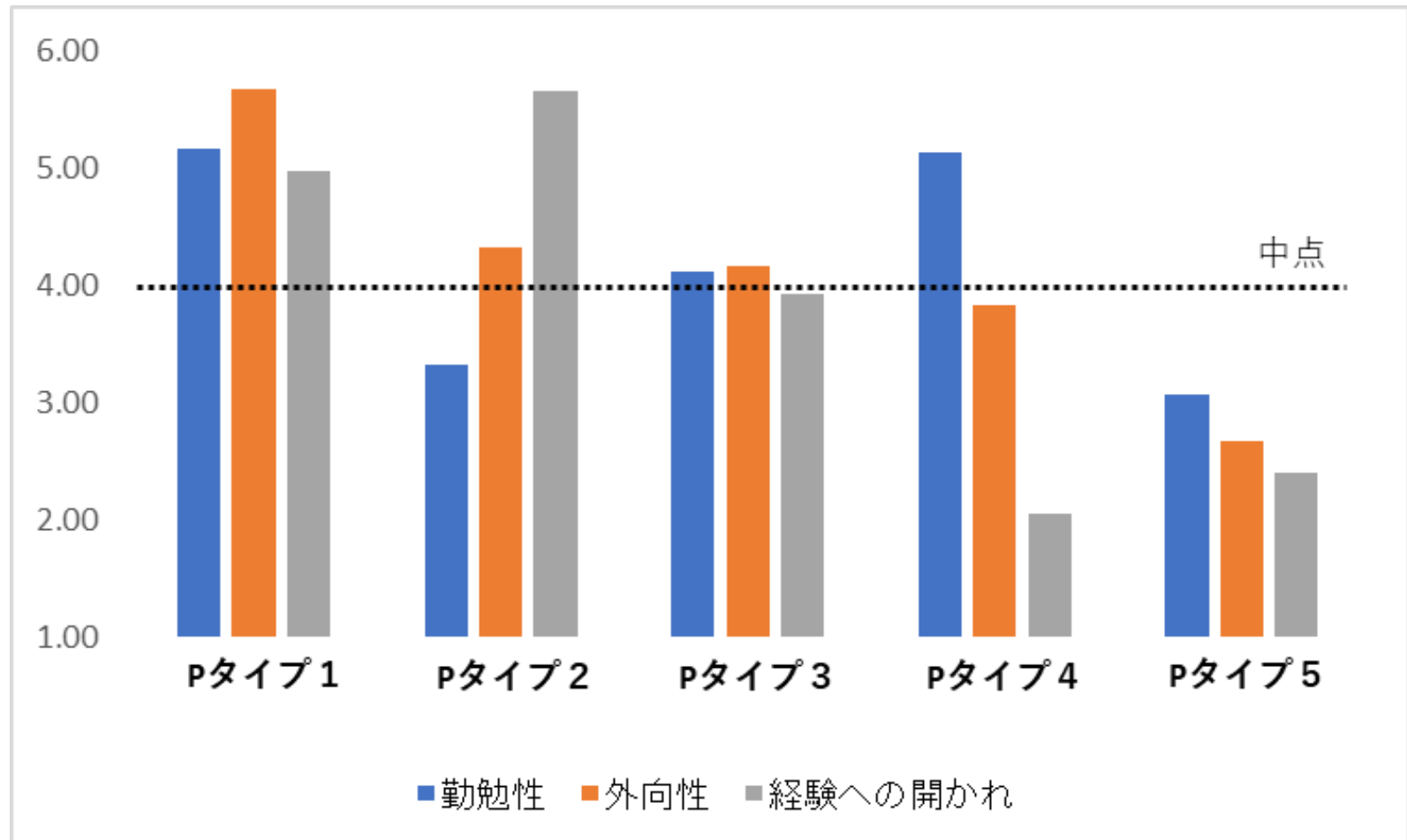
(3) 就職活動○の理由

- ✓第一志望に就職が決まった
- ✓自分のやりたいことをしっかり考えた
- ✓いろいろな人と話をすることができた

(4) 就職活動×の理由

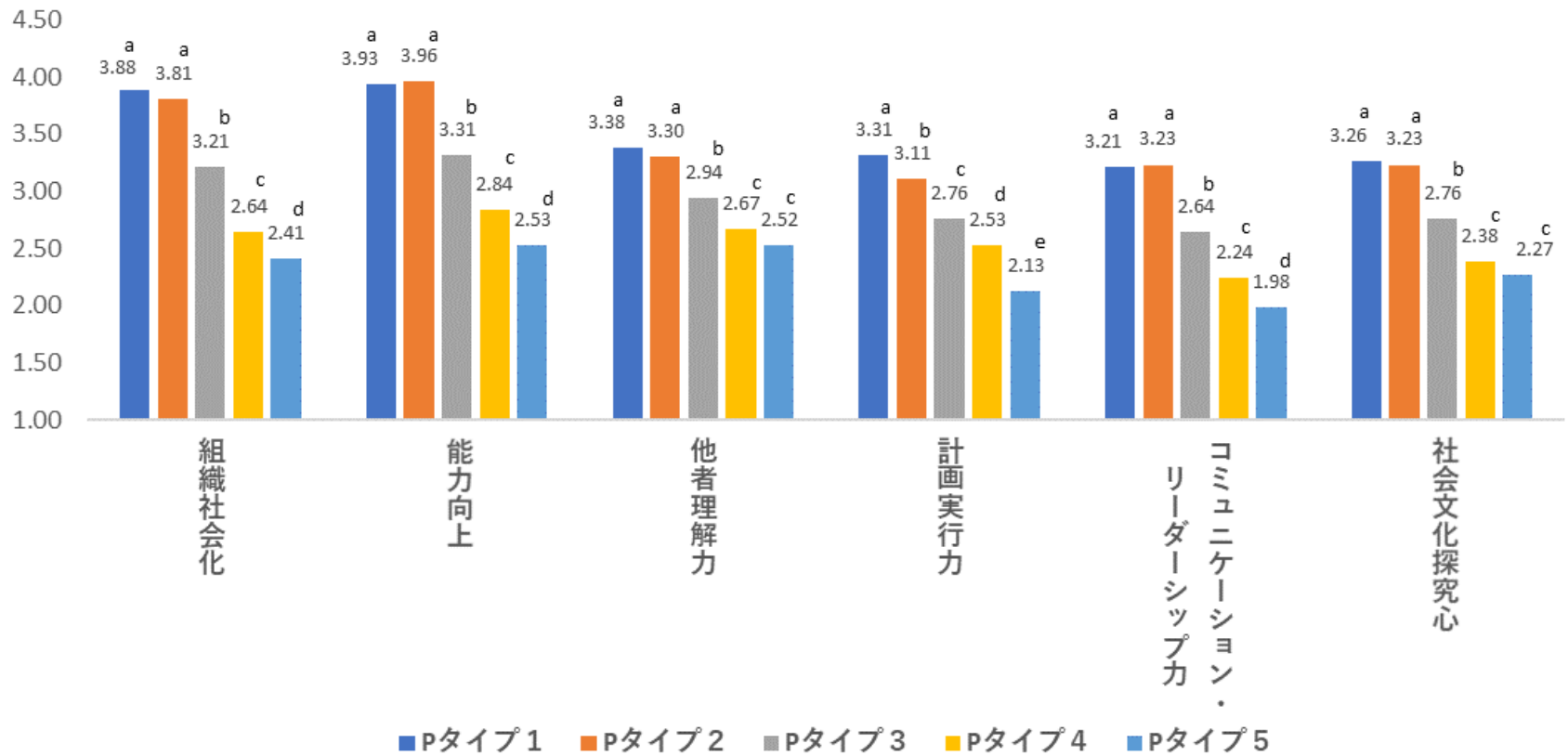
- ✓自分が何をしたいのかよくわからなかった
- ✓就職活動をしっかりやらなかった
- ✓不満足の結果で終わった

25-29歳の社会人3,000人調査より

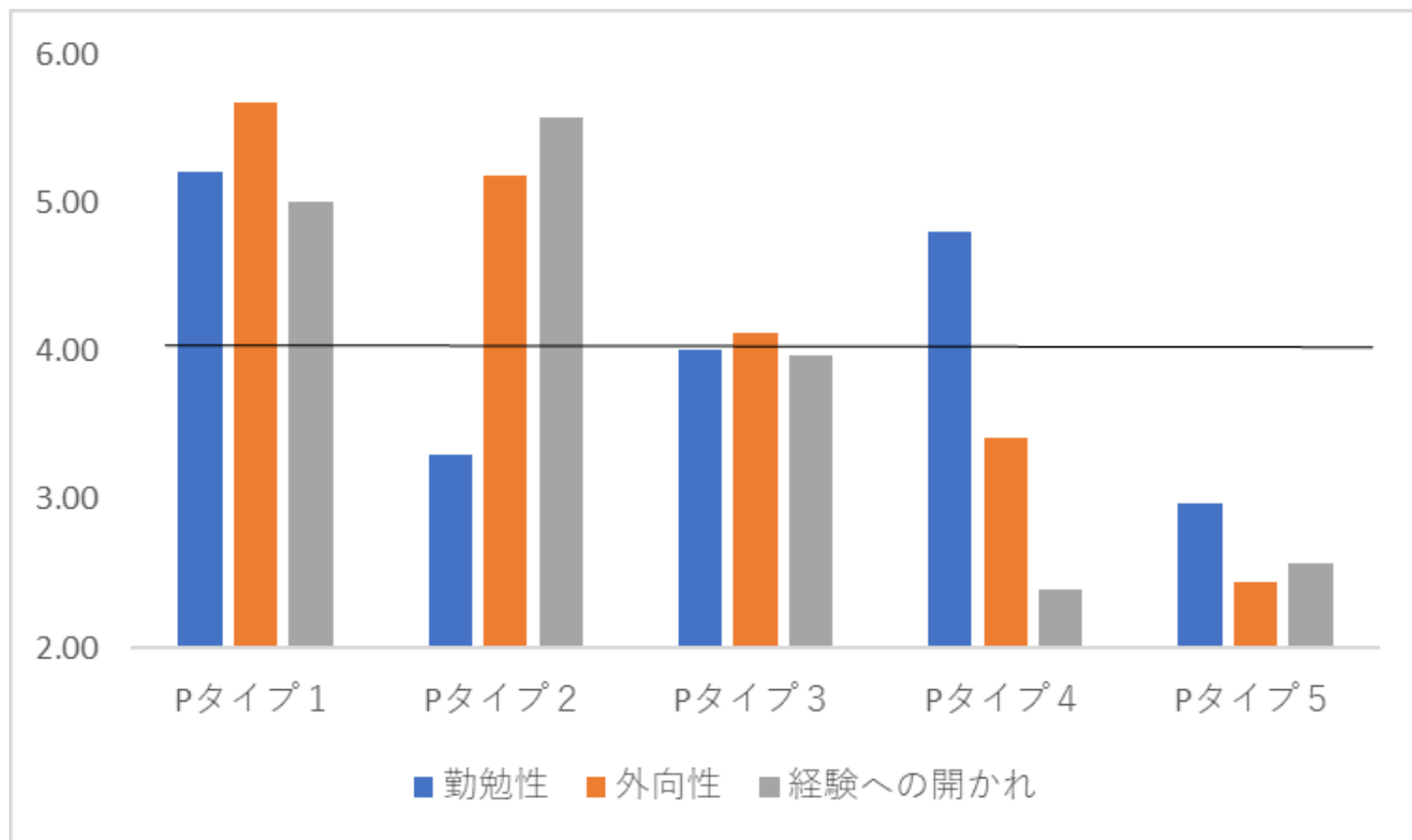


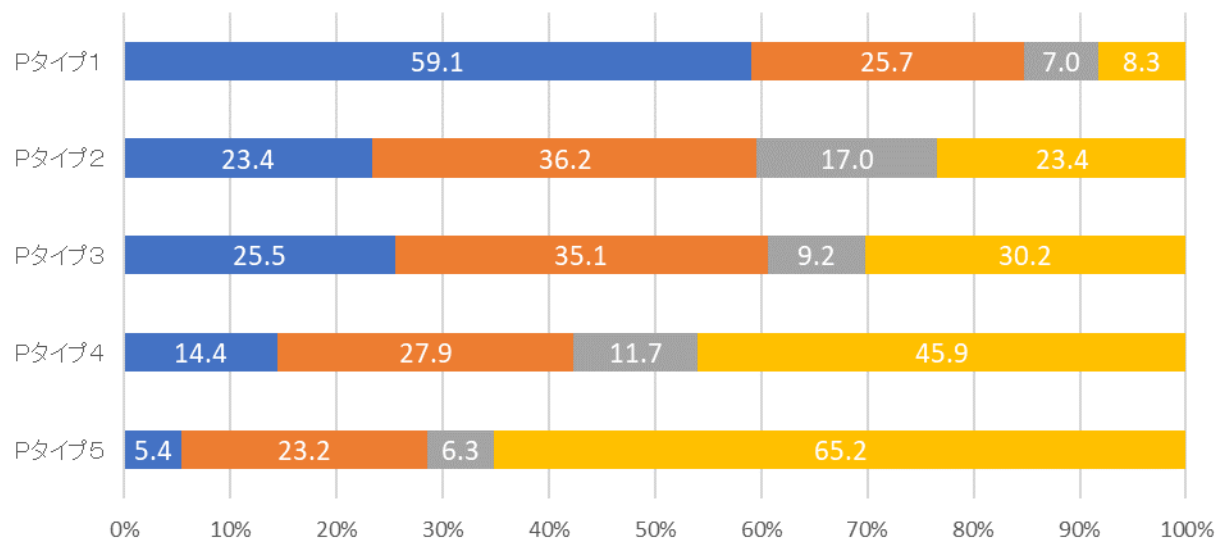
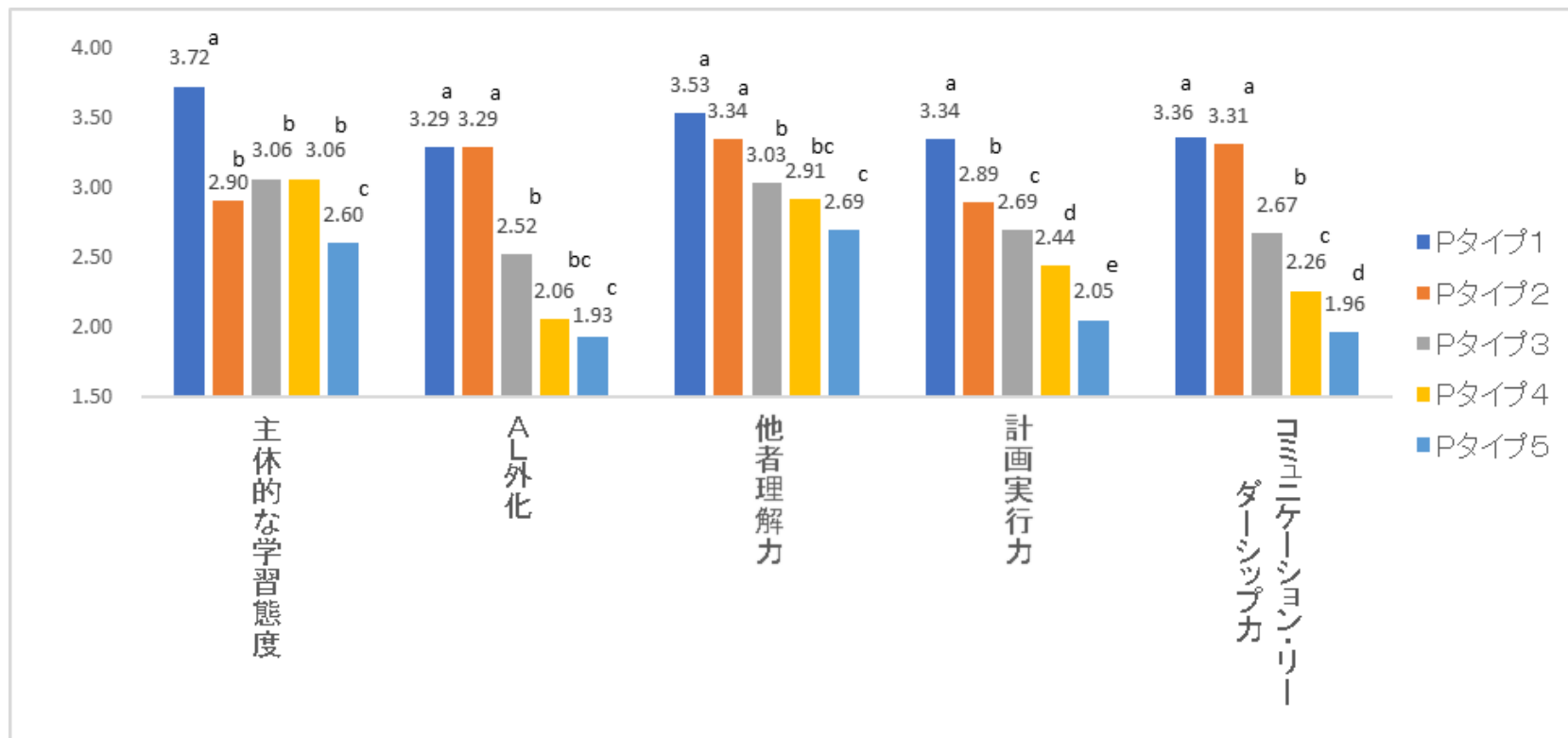
Further Readings 溝上慎一の教育論 <http://smizok.net/education/>

✓ (データ) パーソナリティ特性(ビッグファイブ論)からみるビジネスパーソンの職場適応や能力



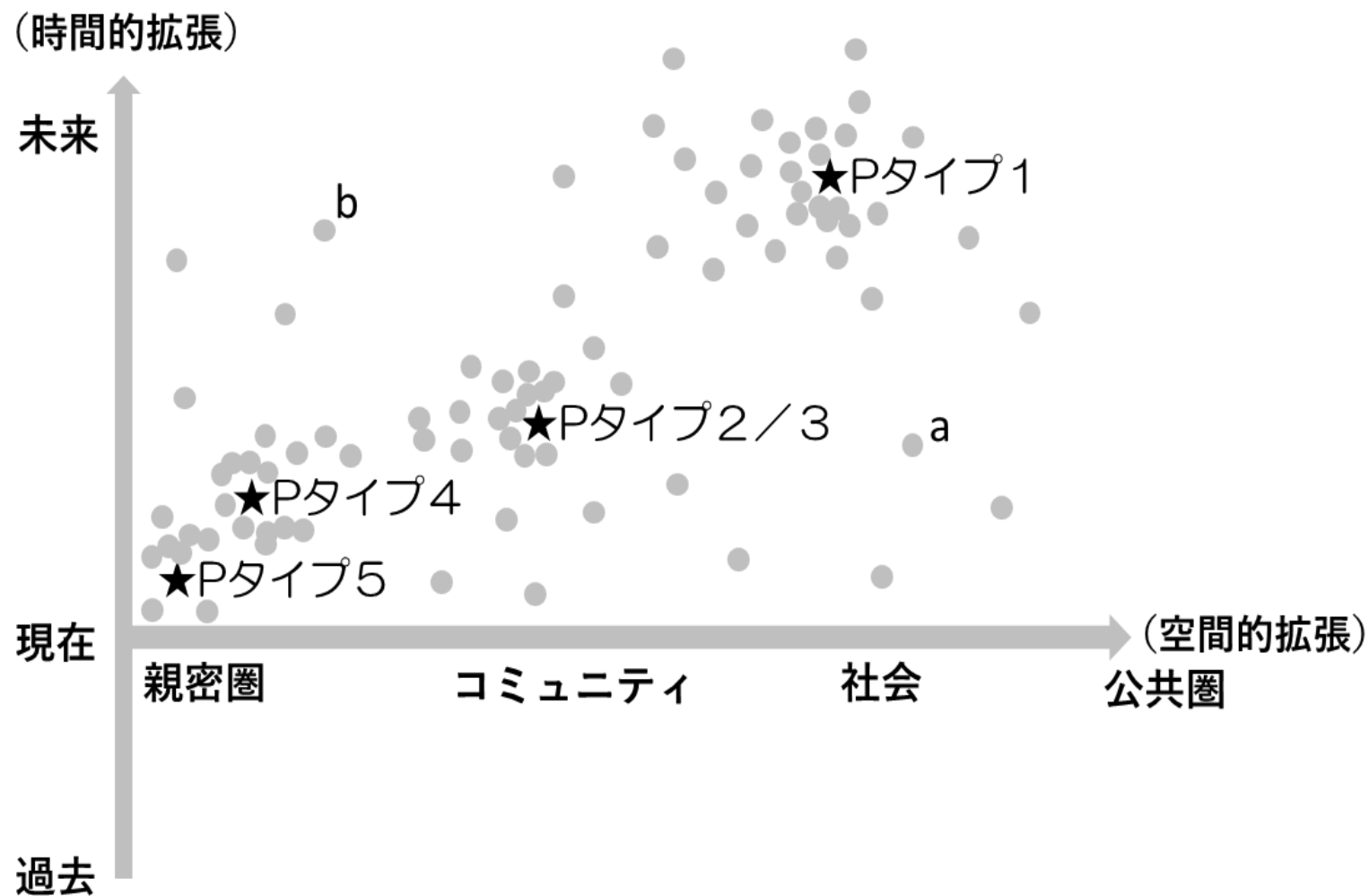
大学3・4年生2,062人調査より(未公表)





二つのライフ

- 見通しあり・理解実行
- 見通しあり・理解不実行
- 見通しあり・不理解
- 見通しなし



時間・空間的な自己・生活世界の拡張とPタイプの位置

主な結果(まとめ)

- 高2～大4までの**資質・能力の変化**は、潜在クラス成長分析によって、**安定した姿**(資質・能力の高クラス・中クラス・低クラス)として抽出された。統計的には、高校2年時から大学4年時にかけて、変化するクラスは見出されない。
- **主体的な学習態度**も大1～大4まで**変化は起こりにくい**ようである。
- **アクティブラーニング外化も変化しない人が大半**であるが(76.5%)、それ以外に、低から高or中クラスへ変化する人が合わせて22.3%見られた。
- **二つのライフ(キャリア意識)**の大学1年時～大学4年時への変化も大きくない。専門分野別に見ても、どの分野でも多かれ少なかれ**安定性を示している**。
- **資質・能力のクラスと就職活動の関係は認められず**、「内定をとり就職活動を終了した」人が大半(8割以上)であった。
- 第一志望の就職先であったかどうか、資質・能力のクラスとは関連が見られなかった。
- しかし、**大学1年時・4年時の二つのライフ(キャリア意識)と第一志望の就職先との関連は統計的に認められた**。資質・能力と就職活動との関連は認められないが、キャリア意識は第一志望の就職先と関連すると言える。

理論的示唆(まとめ)

- 資質・能力を発達的に見る場合には、高校生で高止まりの傾向を示す。しかし、さまざまな活動における成長は可能であり、実際の学生の主観的経験からも認められる。
- 主体的な学習態度、キャリア意識の高校から大学への安定性が認められる。アクティブラーニング外化はこれらに比べると、まだ変化する学生の割合が認められるが、それでもせいぜい25%程度である。
- 資質・能力の高低は就職活動の結果に関連しない。ただし、職場でのパフォーマンスには拡張的パーソナリティが効いてくると予測される。

ご清聴有り難うございました

興味があればお読みください



TOIN GAKUEN

溝上 慎一 (2018).『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』(学びと成長の講話シリーズ1) 東信堂

第2章 アクティブラーニング型授業の基本形とさまざまな創意工夫

- ポイント1 アクティブラーニング型授業における教師と生徒の関係性をつくる
アクティブラーニング型授業に即した生徒の身体化を促す
- ポイント2 個－協働－個／内化－外化－内化の学習サイクルをつくる
- ポイント3 タイマーを表示し、時間を意識させる

第3章 よく思い出す技ありの名場面集

1. ICTを利用して生徒のワークをその時間内でフィードバックする
5. 議論や発表だけが「表現」ではない

第5章 主体的な学習をそもそも論から理解する



溝上 慎一 (2018).『学習とパーソナリティー「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね！」をどう見るかー』(学びと成長の講話シリーズ2) 東信堂

第2章 現場の疑問から学習論を発展させる

- 1 基礎知識を「習得」してからでないとアクティブラーニングはできない？
- 2 アクティブラーニングは「学力」下位層に向いている？
- 7 授業進度の問題をどのように解決するか
- 9 面倒を見れば見るほど生徒学生は受け身になっていく？

第4章 よく思い出す技ありのアクティブラーニング型授業

- 5 作問を通しての生徒同士の学び合い(上級編)
- 6 体育実技でも言語活動としてのアクティブラーニング



学校法人桐蔭学園 理事長

桐蔭横浜大学特任教授 トランジションセンター所長

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2000年講師、2003年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。2014年教授を経て、2018年に桐蔭学園へ異動。2019年より現職。京都大学博士(教育学)。



日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board 委員、学校法人河合塾教育研究開発本部研究顧問、中央教育審議会専門委員、大学入試センター有識者委員、大学の外部評価・AP委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と教育実践研究(学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学―他者の森をかけ抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学―適応から自己形成の時代へ』(2010有斐閣選書、単著)、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(2014東信堂、単著)、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』(2018東信堂、単著)、『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題―』(2018学事出版、編著)など多数。

チューリップMLのご案内

◆溝上研究室が運用するMLです。学校教育改革、学校から仕事・社会へのトランジション、教員や社会人の人材開発等に関する講演会、シンポジウム、研修会等の案内が配信されます。

◆参加者からの発信もできます。積極的にご利用ください。

◆小学校・中学校・高校・大学・仕事/社会 の関係者に配信されます。

桐蔭学園(中学高校)の「授業見学」のご案内



◆桐蔭学園はAL型授業向上を目指して、外部からの授業見学をいつでも受け付けています(ただし、定期考査や学園祭等の期間は除きます)。見学したい方は下記にご連絡下さい。

担当: 佐藤透(satohru@toin.ac.jp)



TOIN GAKUEN